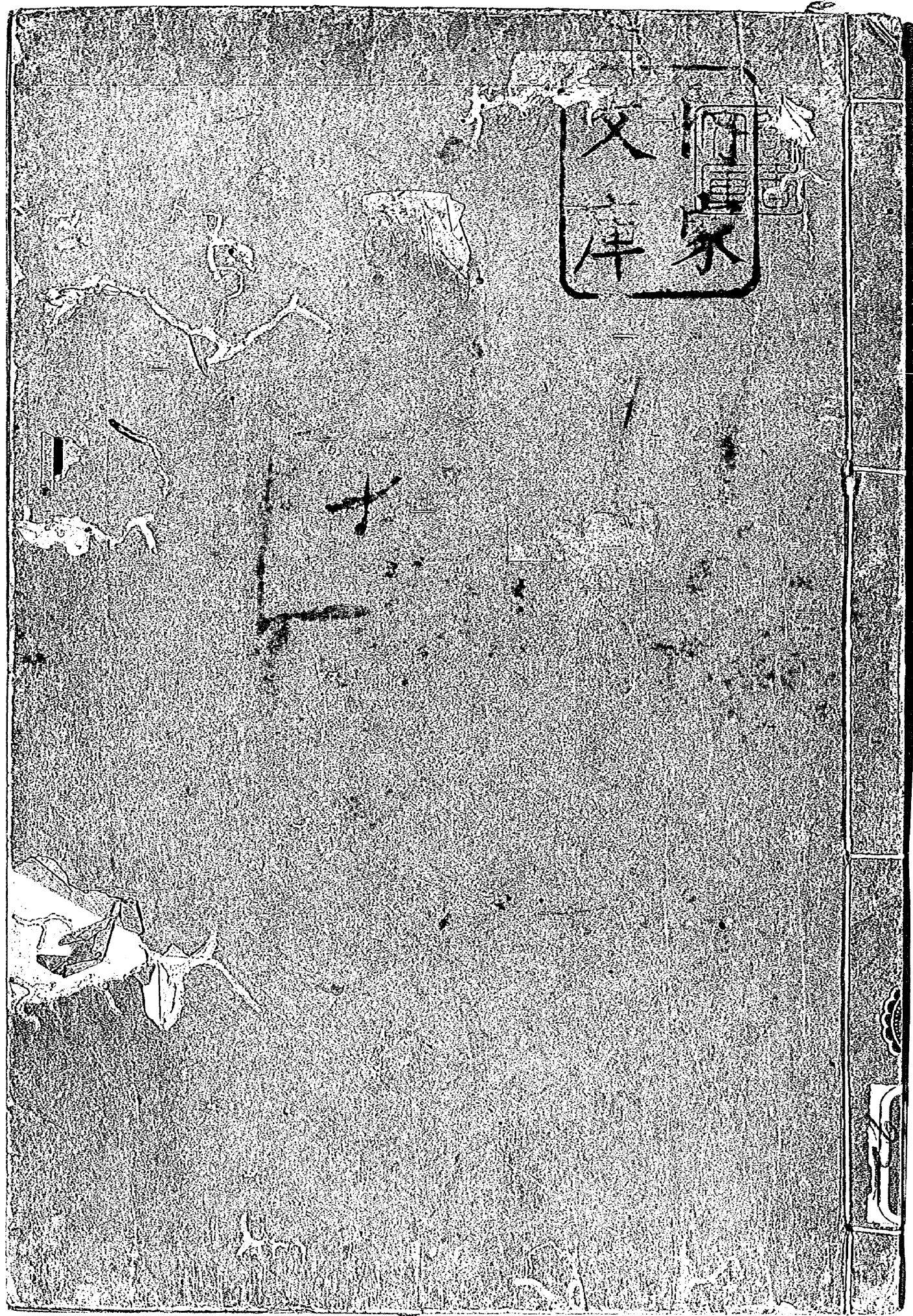


田國雜記

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



勢いありぬき一の文存法こまなえりわ

聖乃舎のほる

大石源千一

あさひ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

提要

此記流布本中宗祇田園雜記といえ本居氏贈玉勝間五など
廣瀬氏 白川古事考共撰 陸奥國白河郡矢槻里の大善院
准后より白河入道入道准后の記と云ふ書と傳へり
十五坊より跡家跡家下向の時に忠孝平賜と云ふ字を
源直朝朝臣家集 陸奥國白河郡矢槻里の大善院
源直朝朝臣家集 陸奥國白河郡矢槻里の大善院
源直朝朝臣家集 陸奥國白河郡矢槻里の大善院
源直朝朝臣家集 陸奥國白河郡矢槻里の大善院

此の如くも、（以下略）又曰、
聖護院准后、（以下略）
とあり又此記中、（以下略）
又云、越後の上杉清延（以下略）

道興准后の傳、諸門跡、
院左大臣房嗣、（以下略）
圖三卷近後知足院、（以下略）
新熊野檢校聖護院、（以下略）
准后大 每年給官爵、（以下略）
臣也

宮之儀、注云三宮、
極之時、（以下略）
官あつたるを男、（以下略）
三年の忠仁公、（以下略）
かゝ例とあり、（以下略）
回國ハ巡國、（以下略）
字ハ周禮、（以下略）
天子の上、（以下略）
雜記ハ、（以下略）
杖、（以下略）

○参之け家万葉集十世五夏草乃露那程不着余云古今六帖五四十八寸玄玉集下
四寸新六帖三九寸外中も云々
○禅閣 古實拾要三小禅閣ト八大同タ八人剃髮ノ後ニ稱ス又大同ト八是辞關白雖不預
天下政務猶蒙内覽宣旨ノ人ヲ大同ト号ス近代ノ前関白タル人其子當時関白不補ハ大同ト稱
セズ同一小内覽宣旨トハ天子ハ捧ル公事ノ文書等ヲ奏聞ノ以前ニ内見スル也関白タル人是ヲ許
サルヲ蒙内覽宣旨ト云々
○関白云々ハヤシクハ対ナレハ
○禅大閣ト云々ハ中略ト云々
○耳云々ハ論語ハ六
十而月順
○云々ハ論語ハ
○後命 古語拾遺ハ六美
皇天之嚴命云云東鑑ニハ於
從嚴命之趣云々廣韻ハ命

云々ハ論語ハ
○後命 古語拾遺ハ六美
皇天之嚴命云云東鑑ニハ於
從嚴命之趣云々廣韻ハ命
云々ハ論語ハ
○後命 古語拾遺ハ六美
皇天之嚴命云云東鑑ニハ於
從嚴命之趣云々廣韻ハ命

教也、増韻ハ命名大曰命
小曰令上出為命下稟為令
○云々の云々ハ新撰字
鏡ハ錢、馬乃波奈年介馬の
鼻向の意也、古今集雜別部
人の云々ハ云々の云々ハ
云々、土佐日記ハ云々の云々の
云々ハ云々の云々の云々の
去也徐云以酒食送也書老
典寅錢孔傳錢送也韓愈
集ハ供張東都門外錢之
○骨肉 東鑑四ハ骨肉同胞
骨肉ノ字ハ禮記文王世子出
○老屈 云々ハ腰の屈云々ハ
新撰六帖ヲ柱カクハハハハハハ
秘ハカクハ云々の云々の云々の
○云々 東鑑六ハ式ハ時宜トモ同
○令期 一ハ古今集ハ九ハ人ハ
○東鑑三同六ハ合期の字あり
○云々 古事記傳ハ十四ハ早

云々ハ論語ハ
○後命 古語拾遺ハ六美
皇天之嚴命云云東鑑ニハ於
從嚴命之趣云々廣韻ハ命
云々ハ論語ハ
○後命 古語拾遺ハ六美
皇天之嚴命云云東鑑ニハ於
從嚴命之趣云々廣韻ハ命
云々ハ論語ハ
○後命 古語拾遺ハ六美
皇天之嚴命云云東鑑ニハ於
從嚴命之趣云々廣韻ハ命

取テ矢種ヲ不惜散々ニ射カ
セテ細川方五百余騎騎法
宿後ナル白鬼文ノ渡ノ末ナル
浅瀬ヲ渡シテ向テ岸ニ打上ル
宮方兵ニ條塚五郎左衛門
馳廻テ高木瓜生真柄北村
在家ニ十余箇所ニ火ヲ懸テ
天正記北國御卷向ノ條ニ
云々本舟ナリ長崎宮方軍
海上行々云々云々

○たぢまをわのめか賀國
江沼郡立花驛ハ越前界ハ
近シ越前界の細石本より
立花ハ二里此間ハ國堺塚を
蓮の浦竹の浦陸越の松を
り名も皆此海をなり
立花あり大聖寺ハ二里官道
筋ハ富樫記ハ越前ヨリ
立花ニ乱入云々橋ハ垂仁天
皇の御代ハ多邊麻毛理ガ常世國より取来り云々

いせれ橋を移りけりぬ
行多良ゆめあやれい橋命うけきけり
同一國を移りてさるり侍りる人乃さるるたり
さるる侍りて
たれもさるりさるりさるりさるりさるりさるり
さるるさるりさるりさるりさるりさるりさるり
幸波乃のさるりさるりさるりさるりさるり
ほろけのさるりさるりさるりさるりさるり
さるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり
さるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり
さるりさるりさるりさるりさるりさるりさるり

くく詠せり身ハ実をわのめか賀國
○たぢまをわのめか賀國
橋を架せり、越前行囊抄三ノ中ハ河原村ハ越前郡下ノ中橋ヲ大橋ト云或ハカレ
橋共云長世間潮入テ小舟入ル川也川下ハ江也安宅ノ辺ニ洲川ト成テ海ニ入ル所ニ砂ヲ壅テ
川筋ヲ附テ水ヲ落ス若シ其川筋大海ノ荒レ時ハ白波ニ砂ヲ上テ山ノ如ク成リ河口塞リ河水
湛レ時ハ小松ノ城下ニモ水中ニ成テ故ニナリ人夫ヲ出シテ海口ノ砂ヲ壅割水道ヲ通シ大洋ハ
水ヲ落ス也云々これハ今考ふる洲河川也壅テ海ノ砂ヲ壅テ河原村ノ砂ヲ壅テ河原村ノ砂ヲ壅テ
なす、古今集秋下寛平御世ノ記ハ「若シ今考ふる洲河川也壅テ海ノ砂ヲ壅テ河原村ノ砂ヲ壅テ」
○相馬將門 大系圖ハ桓武天皇皇子葛原親王三代孫鎮守府將軍良將男相馬
小次郎將門自号平親王、扶桑略記廿五、大鏡ノ外記日記一二卷、大日本史世二皇和
真俗通十二本朝文粹二、元亨釋書十、將門記、其外法ハ今考ふる洲河川也壅テ海ノ砂ヲ壅テ
河原村ノ砂ヲ壅テ河原村ノ砂ヲ壅テ河原村ノ砂ヲ壅テ河原村ノ砂ヲ壅テ河原村ノ砂ヲ壅テ
○たぢまをわのめか賀國、越前行囊抄三ノ中ハ大聖寺ト動橋トの事ハ左ノ岡ニ菅生
天神社アリ社前ニ橋アリ敷地橋ト云長三十間余、富樫記ハ敷地福田ノ諸勢云々、今考
ふる上方ハ加賀國ハ入口ハ大聖寺の城下ニ此城下町の下の方の町端と敷地ト云々
○いせれ橋、今世引渡ト云大聖寺の敷地ト云いせれ橋ハ二里余ありさるりさるり
橋ハ十八町あり
○いせれ橋、加賀江沼郡動橋ト云々驛なり、越前行囊抄三ノ中ハ動橋ハ大聖寺ヨリ
二里余北東ノ方ニ小松ハ三里ニ驛ノ出口ニ橋アリ長廿一間以此橋爲驛名此川小舟入也
後皇乘船ニテ藤原、狭比、安宅ハモ行也歩路モアリ昔ハ越前堺、塩越ノ辺ヨリ藤原狭

寺西四箇寺 元正天皇天皇
 二年出現本山西越前北加
 賀東越中南飛驒以跨於
 四箇國四時有雪登于白山
 則加賀大正寺之東以南隔至
 麻生自此上り九里八町也又同
 山越前國登り只自勝山平
 泉寺二里則當山別當寺平
 泉寺玄乘院天台宗勝山
 ステ禪定上下廿四里程開基
 越前大德泰澄大師平泉寺
 妙理白山大権現雖三所所
 祭五社金劔宮瓊々持尊
 本地不動大御前宮伊井
 冊尊本地十二面別宮忍德
 耳尊本地聖觀音越前知
 大已貴命本地阿彌陀如室
 王子彦火々出見尊本地應
 空藏越遊行囊抄三中小
 金澤ヨリ白山へ九里、諸國主齊録高二百石越前國大野郡平泉村天台宗平泉寺玄成院

高き山に登りては、
 あらゆるものも、
 こゝに美禊の湯とて、
 おびしき水の流れ、
 あれは、
 月影の、
 深き、
 あつた、
 松人の、
 地、
 まゝの、
 松の

○禪定 高山に登りては、
 故考の天峯の麓に登りては、
 道瑜大傍正を後傍正なるの、
 大徳なるを後傍正なるの、
 中々、
 魅の、
 り、
 六、
 六、
 四、
 神、
 ○吉岡、
 ○下、
 神、
 ○つ、
 白山、
 ○矢、
 ○伊

山黑遠無日月光有大地獄跡極無間云云
○志の山 十王讚嘆抄云初七日山路ニカル此山死出山ノ申也此山遠事八百里峻更壁ニ
向ヘルガ如シ云々古今集卷五志の山云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
後撰集卷五のり云々

○志の山 和名抄越前國敦賀郡鹿森郡延喜神名式云敦賀郡加地留神社又鹿森
神社古今集離列部云々

○志の山 越中國新川郡
泊と塚とのふあり人夫抄
廿六云々

不動山城主云々越遊行囊
抄四下泊ヨリ云々塚ニ里此間ニ
宮崎アリ此宿壽永比水曾
義仲ノ屬ノ平家ヲ攻撃ノ宮
崎太郎ノ住所也又治養四年

光明山鳥居前ヲ先給高倉
宮御子中一人乳母讚嘆前司
重秀云々者北國ノ具下ニ進セ
ケルヲ水曾義仲モテ奉ル勢中
國宮崎ト云所ニ御所ヲ造ルニ
進ラセ御元服有テ水曾宮
トモ申又還俗宮トモ申ケリ後
堀城ノ今屋殿申ケル此宮
御事ナリ見事記云々當所ノ
春日社彼宮ノ旧趾ト云

○志の山 塚の驛家越中
國屬新川郡越遊行囊抄
四下泊到守塚ニ里塚川
舟渡左ノ方海ノ四町計是越中
越後塚也古名寒原ト云シ
地ナリ源平盛衰記廿八平
泉寺ノ長吏弁明威儀師三位
中将前ニ跪テ申ケル水曾ハ此間越後ノ國府下兼味方軍ニ勝テ越前加賀ヲ隨ハサセ給ヒ元ノ早鳥
立ヲ打上リ侍ラテ存儀越中越後ノ塚ニ寒原ト云難所アリ敵カラテ越テ越中ハ入ラズ味方ノ為ニ由テ
鋪師大事カレヲ打塞テ候ヒテ水曾為ニ大事ヲ侍ルヘ云

御事ナリ見事記云々當所ノ
春日社彼宮ノ旧趾ト云
○志の山 塚の驛家越中
國屬新川郡越遊行囊抄
四下泊到守塚ニ里塚川
舟渡左ノ方海ノ四町計是越中
越後塚也古名寒原ト云シ
地ナリ源平盛衰記廿八平
泉寺ノ長吏弁明威儀師三位
中将前ニ跪テ申ケル水曾ハ此間越後ノ國府下兼味方軍ニ勝テ越前加賀ヲ隨ハサセ給ヒ元ノ早鳥
立ヲ打上リ侍ラテ存儀越中越後ノ塚ニ寒原ト云難所アリ敵カラテ越テ越中ハ入ラズ味方ノ為ニ由テ
鋪師大事カレヲ打塞テ候ヒテ水曾為ニ大事ヲ侍ルヘ云

御事ナリ見事記云々當所ノ
春日社彼宮ノ旧趾ト云
○志の山 塚の驛家越中
國屬新川郡越遊行囊抄
四下泊到守塚ニ里塚川
舟渡左ノ方海ノ四町計是越中
越後塚也古名寒原ト云シ
地ナリ源平盛衰記廿八平
泉寺ノ長吏弁明威儀師三位
中将前ニ跪テ申ケル水曾ハ此間越後ノ國府下兼味方軍ニ勝テ越前加賀ヲ隨ハサセ給ヒ元ノ早鳥
立ヲ打上リ侍ラテ存儀越中越後ノ塚ニ寒原ト云難所アリ敵カラテ越テ越中ハ入ラズ味方ノ為ニ由テ
鋪師大事カレヲ打塞テ候ヒテ水曾為ニ大事ヲ侍ルヘ云

采井二里半 片町二里半 捕崎二里半 鉢崎三里有關 鯨波二里 柏崎下略

○りさの波 越後國頸城郡鉢崎と鯨波の川あり

○らららるの波 同國羽羽郡鯨波驛、柏崎より一里西の方邊辺なり、藤原系十三四の海

里小者鉄千尺鼓浪成雷噴沫成雨水族驚畏皆地匿莫敢當其雌曰鯨大者亦長十里眼

晴為明月珠、翻譯名義集二、摩竭或摩伽羅北云鯨魚雄曰鯨雌曰鯢

○やまこひわらふとけあふ川 越後國羽羽郡安田村上杉謙信の以安田上総介順易と

云一人の住所也、同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

崎より南の山路の方あり

○大井 越後國魚沼郡大貝村木落村有

○うらうらふあふ川 同郡山室村、三桶村、梅花無冬蔵見置と云、少渡信濃河、河在越後有妻

見置之間、河水甚濁其色如八幡之放生河、越後以此河為急流第一也、同郡茂川村等、柏

吾妻村のつぎのあり吾妻の森と云ふ吾嬭明神の社あり橋姫を祀とす一之森の側あり
あつたつた本更津浦に接す、房総志料一海辺の順路に大崎、中里、吾嬭、本更津、貝淵、
櫻井、らと望陀郡云々、景行紀四十年冬十月日本武尊登陸之云云進相模欲往上總望
海高言曰是海耳可立跳渡乃至海中暴風忽起王船漂蕩而不可渡時有後
王之妾曰新橋媛德積氏忍山宿禰之女也啓王曰今風起浪急王船欲没是以海神
心也願以妾之身贖王之命而入海言訖乃披瀾入之暴風即止船得着岸故時人号其
海曰馳水也云云古事記に八故七日之後其後御柳依于海辺乃取其御作柳陵而治置
也とありこれ今の吾嬭明神の地なりと云ふこの神名ハ碓氷嶺中々吾嬭者耶とのつたひ
たふおせり前のセニ下引

○神野山 上総國周雅郡と天羽郡とふわりと山鹿野山とも庚山ともなり和漢三才
圖會ハ神能寺在神能村寺領五十石とあり、房総志料一ハ周雅郡鹿野山真言宗
新義塔頭九院堂内軍荼利夜叉明王置堂宇社鹿房州二總三申タリ山中巨樹多シ當
山の軍荼利夜叉明王日本武尊神像ニテ往昔生入山鎮トシタル後世釋氏ノ輩兩部
習合ノ説ヨリ倭武神武雄略ヲ夜叉明王ニ比シ祭ル也山中本ヨリ大鳥神社アルニテ知ルベシ
今ニ至テハ却而配食副祠トナリ云云これふつたつた今も此山ハ華表ありと云ふ大鳥ノ神
社の山あり神山なりと云ふカノ山といひあれは又カノウザンといひ後世神像とも佛像のこと
しく其神をハ別社に建く如蓋の守護神のといふなりおれりおれりおれり武蔵の階谷
不動尊も日本武尊の像あり古事記中卷ハ倭建命到相武國之時中略入坐其野亦其國
造火着其野云云と云ふと云ふ狀を摸つた像なり炭の中ハおれりおれり明王の像ハ似や
ひくれハ不動尊といふなり此不動尊ハ華表あり神野山と同例なりと云ふ

諸國圭脊録ハ高五十石余周雅郡神野山真言新義鹿野寺、なるおれのつたつた云々
カノヤマを句の中ハおれり

○清澄山 安房國長狹郡あり同郡の海辺濱荻村といふありも天保村といふありり
東條よりり山路といふ山下り登り三十町半なり若山の山ハ平地ありり觀音を安置す
又神社あり、房総志料ハ千光山清澄寺寺領二百石彼寺の像起又天富命を崇
靈場なりとも清澄山の觀音堂ハ上総國夷瀨郡の地ありり安房の長狹郡の地ハ
と云華表あり堂あり一里此山西北ハ上總國望陀郡夷瀨郡に接し領地山中三里四方あり
云云、和漢三才圖會ハ清澄寺真言寺領八十石とあり、誤なり、諸國圭脊録ハ高
百七十七石八十長狹郡清澄村真言新義清澄寺と有、長祿寛正記ハ安房國長狹郡
東條片海市川村被配統配所三生子今日蓮上人也貞應元年壬午二月十六日生十二
歳ニテ清澄山ニ上り真言道善法印ノ門弟ト成云々
○通夜 東鑑十四、平治物語下、平家物語二、太平記廿五、同廿五、盛衰記十六、同廿六同
甲、同四十四、沙石集上、八幡愚童訓下など云々
○曉のたれと死星 万葉集廿七、阿知等使乃如波多例等扱介云々、源氏初音卷ハおれり
たれと死星、彼者誰時、おれりおれりおれりおれりおれりおれりおれりおれりおれり
ともたれと死星ともおれりおれりおれりおれりおれりおれりおれりおれりおれり
○天保、まゝ、荻村、房総志料ニハ長狹郡外浦の順路浪太、磯村、前原村、天津村、
濱荻村、内浦、小湊、とつたつた海村なり
○昔り、おれの通ひ路、古今雜上ハおれりおれりおれりおれりおれりおれりおれりおれり
○那古親者、安房國平群郡、和漢三才圖會六十六、那古寺在那古村真言宗寺領三

○揚子岡 東鑑一治義四年十月十二日黒小林郷之北山構宮廟被奉遷鶴岳宮於此所也
本社者後冷泉院御宇伊豫守源朝臣賴義奉勅定征伐安倍貞任之時有丹祈之旨康平
六年秋八月潜勸請石清水建瑞藤於當國由比郷今号永保元年二月陸奥守源朝臣義家
加修後今又奉遷小林郷云云神社主田録不相模鎌倉郡鶴岡八幡領八百四貫文神主大伴圖書
別當我覚院北條分限帳鶴岡領五百拾五貫八百七十二文鎌倉社地五十貫文久良岐郡杉田之
内五十貫文鎌倉之内以上三百五十五貫八百七十七文残月抄抄注あり今ハ子孫承継不公セリ
○名号と云云下総葛飾郡古河領の内島食村あり日光山の道筋の必西古海道と云
○感徳 説文の感動人心也緒絲端也増韻不感應又感通一感激又感動

○重陽 魏文帝與鍾繇書歲往月來忽復九月九日九為陽數而日月並應故曰重陽志
林東坡云嶺南氣候不常菊開時即重陽十月菊始開乃與客賞重陽事文類聚十一小汝
南桓景隨費長房游学累年長房謂景九月九日汝家當有灾厄急宜去令家多作絳囊
盛茱萸以繫臂登高飲菊花酒此禍可消景如言舉家登山夕還家見雞狗牛羊一時暴死
長房聞之曰代之矣今世人每至九日登山飲菊酒婦人帶茱萸囊云々歲時記曰都城重九
後一日宴賞辨小重陽唐李白詩菊花何太苦遭此兩重陽白氏文集六今日重陽
節云々

○菊 和名秋菊如波良与毛木一云可波良於波岐又蘭兼名花云一名蕙和名本草云布知
波賀萬續万葉論五菊ハ花ハ亦ハ音ハ波ハなれハ用ハひハよりハ万葉ハ一首ハハと云云
又或人美と詠ハと云云桓武天皇よりハ日本後紀ハ引ハ云云類聚國史大同二年の西ハ菊の
多ハと云云ハ野沙ハ抄ハりハハ
菊と云良の朝の末ハ今ハのハと云云ハ異國ハよりハ後ハりハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云

自然ノ野山ハ生ル菊ハ長ク有リと云云ハ後ハ不楚詩ハ梅ハりハカハ多ク有リと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云
これ採ハりハれハ菊ハのハ採ハりハのハ後ハ水尾院神製ハあハりハ世ハのハたハりハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云
吾國ハ自然ハ有リ菊ハと云云ハ音ハ波ハのハ聲ハりハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云
又古ハ今ハ六ハ帖ハ六ハ十ハ四ハ帖ハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云
秋ハ下ハはハ菊ハのハ采ハりハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云
人ハハハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云
たハびハなハりハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云
うハのハ採ハりハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云
後ハハハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云
其ハ據ハりハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云
皇帝歌曰ハ己ハ己ハ乃ハ志ハ見ハ礼ハ乃ハ阿ハ米ハ尔ハ菊ハ乃ハ汲ハ奈ハ知ハ利ハ曾ハ之ハ奴ハ倍ハ峻ハ阿ハ多ハ羅ハ蘇ハ乃ハ香ハ半ハ
これ菊の音語の七ハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云
一ハ平城天皇大同二年九月己巳幸神泉苑琴歌ハ四ハ位ハ己ハ上ハ共ハ排ハ菊ハ花ハ手ハ時ハ皇ハ太ハ牙ハ頌ハ歌
云美耶比度乃曾能可迦米豆留布知汲賀麻岐美能於保母能多乎利太流布和之白歌
璫比度能己己乃乃麻丹真布智汲賀麻宇倍伊呂布賀久尔保比多理介利群臣俱称萬歲云
これ排菊花とありと御奇ハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云ハのハと云云
一ハ万葉八尋秋七草の奇は芽之花乎花葛花豐麥之花姫部志又藤袴朝觀之花と云云
為待ハ菊花ハと云云ハ又類聚國史七十四仁明天皇美和四年九月己巳天皇御紫宸殿宴重陽

節命文人同賦露重菊花鮮之題云同十二年九月癸丑是日重陽節也天皇御紫宸殿賜宴
今賦九日沈蘭之題云日本紀略延喜三年九月九日重陽宴題云玉砌蘭香和漢朗詠集菊
詩蘭苑自慙為俗骨又蘭蕙苑風摧紫後云これらも菊と蘭と同一物と云ふも
とも唐土の菊を以てかりありと云ふれども今の菊と舊時程の違ふあり同賦の中
以て菊のありて菊と蘭とを別れしは此國の菊を以て菊と音語を用ひたるなり
つひあれは菊の字を蘭の字とあてりて菊と蘭とを別れしは白氏文集に蕙蘭
菊叢又老菊衰蘭而三葉古文秋風碎菊有秀菊有芳菊楚辭春蘭兮秋
菊長無絶兮終古又唐高僧傳中云春蘭秋菊各擅其美云々これらも似たり
よも菊を以て菊と蘭とを別れしは又一説中蘭物菊と春蘭夏蕙秋菊と名のうら
よも菊を以て菊と蘭とを別れしは又和物傳五抄中春蘭夏蕙名と名のうらよも
菊を以て菊と蘭とを別れしは又秋物傳五抄中菊を用ひたり云々此のうらよも
菊を以て菊と蘭とを別れしは又類聚國史七十四平城天皇大同二年九月癸巳幸神泉苑記曰九月九日者菊花
豐樂御食日在也忌避所存依此年之間停止御行源然時節止云物者不可
鹿擲止自昔云來留事有依天奈此乃豐樂御食之始賜布故是以御酒賜信惠良
文選酒幣大物賜以宣云云との詔も忌避所存と云ふも考ふ天武紀十四年
九月甲辰朔壬子天皇宴于舊宮安殿之庭とあり其翌年朱鳥元年九月戊戌朔丙午天皇
崩云これ九月九日なれば此昇遷の日を避るる重陽の節は久しく停りたり雜令
九月九日ハ除りたりと云ふ引くも天武の御代まで節日なりと云ふも文武紀大宝

二年十二月甲午勅曰九月九日十二月三日先帝忌日也諸司當是日宜為廢務焉この後重
陽宴又云天武天皇の御代までありと云ふも夫より大同元年まで凡百二十年陽の
間ハ中絶して菊の節もいへば此大同二年の詔も菊花豐樂御食日とあり天武の
御代までの例をわけて宣へばなほ例ありと云ふも重陽の節なりと云ふも
祝しむありと云ふも僻業扱ふ大室よりけり天平云此文ハ次より引くもこれハ
昔吾國は菊ハなりと云ふも古書の穿鑿の多しと云ふも又夫抄ハ
引く甲斐國風土記云鶴郡有菊花山流水洗菊飲其水人壽如鶴云これハ偽作の
ものありと云ふもあれはもれも切ることあり貴之集上よりひびの山里えれは
命と云ふも人を信ずるも此等ハ彼風土記の文ありと云ふものあり延喜の昔は
新羅海に菊と云ふも古代の記りも德國風土記とありつゝわが國の菊又今の
菊も東海道菊川の土大原村に菊と云ふも菊の川ありと云ふも今津の藤川の上ハ
白山の麓に菊と云ふも平と云ふも山菊のさく谷ありと云ふも川ありと云ふも
酒と菊の氣油と云ふも名を云ふも山城名勝志十四愛宕郡菊淵ハ高臺寺東山の
間有清泉地多菊花是為高臺寺十境一曰菊潭水流遠山谷出北門前云々あり
まのありと云ふも多し菊ありと云ふも菊ありと云ふも白も交り詩学大成ハ南陽
郡縣有甘谷谷中水甘美上有大菊落水後山流下得其滋液谷中人家飲此水上
壽百二三十其中百餘歲云云これの同類ゆゑ自然ハ山谷に生るものあり異國
渡りて種を植ると云ふものありと云ふも今の世ハ後世も多し菊ありと云ふも
ありと云ふもありと云ふも此中ハ美園より後りて菊ありと云ふも又ありと云ふも
このありと云ふも筆作三代集前之草於拾遺集の菊ありと云ふも菊のあり

里の宗師... 中禪寺私記... 性靈集... 沙河門勝道上補陀落山碑一首...
○ 歌漫... 五軍韻瑞... 渺濤水貌... 漫水敗物也... 曰漏也... 又汚也... 又水冒物謂之漫云... 孟浩
然詩... 挂席候明翁... 渺濤平湖中... 白氏文集... 蒼茫生海色... 渺濤連空翠

○ 湖水... 中禪寺の前... 黑髮山の半腰... あり... 日光山名跡志... 湖長三里幅二里魚不
往惣而此上... 大湖港... 小湖四十... 中禪寺私記... 千部會縁起... 鏡湖云... 三月
會縁起... 大湖港... 千町云... 性靈集... 補陀落山碑... 曰畧粵... 有下野州補陀落
山... 慈嶺... 挿銀漢... 白峯衝碧落... 以去... 神護景雲元年四月上旬... 踐上雪深... 巖峻雲
霧雷迷... 不能上也... 遷佳半腰... 三日月... 天應二年三月云... 到其頂云... 山之為狀也東西
龍... 臥弥望... 無極南北... 踞棲息... 有興云... 北望... 則有湖約計... 一百頃東西狹南北長
西顧... 亦有一小湖... 合有三十餘頃... 時坤更有二大湖... 畧計一千餘町... 東西不闊南北長
遠云... 結瑠菴... 于其坤角... 住之云云

○ 哥の淡... 中禪寺... 向岸あり堂あり吉祥天弥勒并金剛童子を安置に因ふ
云此湖水の源... 華嚴の滝... 幅八間... 四十五丈下流... 大谷川... 山あけの橋
下をながる... 宿川の水源... 性靈集... 延暦三年三月下旬更上... 經五箇日... 至彼南湖
返四月上旬... 造得一小船... 長二丈廣三尺即與三子... 掉湖... 遊覽云... 託南洲... 其洲則去
陸三十丈餘方圓三十丈餘云云

○ 聖者... 職原欽... 歷沙弥戒... 之後任之天台堅義之時任之也
○ 黑髮山... 中禪寺権現より東の方より登りあり... 則中禪寺の上... 一名男體山又
補陀落山とも云日光鉢石町より中禪寺迄今里より三里あり... 後や... 牛馬の往
返あり馬返村あり登り一里... 急や... 馬足不立中禪寺より黑髮山絶頂まで

○ 嶮道登り三里積雪... 寒風肌を刺す山頂... 三社権現小社あり四十八日垢離
して毎年七月七日登山... 万葉集七十一... なく... 黒髮山ハ何國とも定む
不國... 正廣日記... 吾妻路之裏... 宿坊... 此山... 日光町よりこれ
○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

○ 吾妻路の裏... 日光山名跡志... 馬返村... 牛馬を... 日光町よりこれ
まじ今道二里

① 俗宴 天智紀一宴字多
 取よりあり拍上の約り多
 俗の字とては拍上約りの多
 言なり頭宗紀行字掌慶亮
 拍上賜云とされと釋日本紀云
 飲酒之美也とあり竹取物語
 行はばとて言ふやあけはは
 うの俗物後系若世葉花
 物後系をのあ後世同浅藤は
 同中の系評なごあうあけ
 あををの俗のあけあけの
 あごともあり万葉十八卷を
 さうみのきとあけの酒宴の
 意へ圓機活法は宴會飲
 也史樂書酒食者所飲
 合歡也

数々の入るるに
 形ありに
 有りしれ
 ありて
 ありて
 ありて
 ありて
 ありて
 ありて
 ありて

云く、吾妻路之豊村延年の
 猿樂初る入るることとてい
 云く
 ① 古乙丸 後然多か大納言
 法印のやつひし路丸云
 此巻ひやく童名を何れとて
 多小右記寛仁三年二月十
 六日十壽丸於家侍所一令
 加元服^{名馬} かつくをせり
 ② 五更の鐘 五更前鼓は
 注せり、天智紀十年夏四月
 置漏^チ射於新臺^チ始^チ打候時
 動鐘鼓此漏射者天皇為
 皇太子時始親所製造也
 云云、燕石雜志もいゆ
 ③ 秋の別 古今集哀傷部
 附しめあれ移り人の
 何れもあれ移り人の
 何れもあれ移り人の
 何れもあれ移り人の

古乙丸の
 古乙丸の
 古乙丸の
 古乙丸の
 古乙丸の
 古乙丸の
 古乙丸の
 古乙丸の

上毛野君下毛野君之始祖也景行紀五十五年以彥狹島王拜東山道十五國都督是豐
城命之孫也然則春日冠野國而豐城命之孫云同五十六年秋八月詔諸別王曰汝父彥狹
島王不得尙在而早薨故汝等領東國是以御諸別王兼天皇命且欲成父業則行治
之早得善政時蝦夷騷動即舉兵而擊焉云是以東國之無事焉由其子孫於今有
東國之稱也以此考之則荒山ハ豊城命と彦狹島王とを祀りて幽宮とす御諸別王ハ河
内郡に坐する治國の政を司ひしに於て此地ハ現在の宮なれども頭宮といひ
るは後中略して守都宮といふなり書紀神代上伊弉諾尊云構幽宮於路
洲一寂然長隱者矣又同紀頭此云于都斯と頭見國とも頭見蒼生此云守都志阿
鳥比等久佐ともいふ同通證三頭見ハ現在ノ義也云云と此神を神名帳頭注又宮記
等は事代主命といふと云ふ一説ハ豊城命と彦命とを以て一真龍ノ國号と云ふ
豊城命ハ下野國三荒山神社に於て日光山名跡志ハ新宮日光山大權現大已貴命
彦尾田心姬命本宮大權現味耜高彥根命守都宮大明神と御一躰則守都
宮の額も日光山慈現太郎大明神と作さるる云云慈現ハ今慈間ともあり考ふと
二現の字ありん然るに訓ハやと云ふ本郡ハ長子の孫と云ふ二荒の御子神と云ふ
説ありん其本大已貴命の一名と頭國玉神と云ふ又豊城命御諸別王も此國に
坐す現國と用南流ひしと頭國魂と云ふ形勢なりと云ふ中略して其國を經
營坐し功徳ある作國玉神聖國御魂とも云神名式ハ山背大國魂命神倭大國魂神
和泉國玉神社攝津國生國魂神社伊勢國大國玉比賣神社尾張大國靈神社遠江
國淡海國玉神社など多し皆國と宮とを祀りて大已貴命の一
神に限りては名ありぬと御諸別王と頭國玉とを祀りて大已貴命と云ふ

事代主とも味耜高彥根ともつゝ本れらありん然るに日光山の本宮と瀧尾とハ
御諸別王の頭宮と坐する所ハ御祖神と日光山を祀りて守都宮と云ふと云ふ
彦狹島王なるん是を祀らざる二神の現まらざるを語略して云ふと云ふとあれは
現れぬのち山城の如茂の御生山も生ハ夜字ハ御現山の義と云ふと云ふと云ふと
子種の家なり万葉下付阿礼座師神之盡揚木乃孫繼嗣云云とありん然るに二現の
山ありと荒字を借て二荒と書多の韻ハ阿と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
御諸別王薨まらざる後此王の御子孫の代ハ此王とも二荒山を祀りて新宮と稱しん
され新宮ハ御諸別王あり後此王の御子孫を以て二荒山神社と云ふ守都宮乃
くハ御諸別王の頭とありん然るに此王と正殿と一豊城命と彦狹島王とを
相履ふ祀らざるなり新和奇集ハ此王と正殿と一豊城命と彦狹島王とを
神あり二荒明神之子也といふなり
○聖道所 大聖世尊遺法故聖道と云聖道門三有二大衆二小衆也大衆中頭密推
實等差別アリ大衆宗ハ真言佛心禪家天台華嚴三論法相等宗門ハ小衆宗ハ俱
舍成實諸部ノ律宗等ナリ
○紀伊國杉川寺 紀伊國那賀郡在風猛山杉川寺本尊千手觀音西國巡礼所三番目
○門跡 此ハ西國の聖護院と云ふなり古實拾要一門跡ハ法親王居り玉
寺院ヲ云寛平法皇仁和寺震居ヲ構玉ニヨリ起レリ御門ノ跡ト云義ナリ攝家清家ヨリ
入道ノ門跡ノ室ニ入ルモ門跡ト唱フ然レ准門跡ナリ云

今更ら改かこゝの扱ふをひくあへり只そのとれごとを多ひく古今以後の事ふ合せとて
和名抄に分て抄しとて誤のこゝろの終中々々抄とてなす

○題とてなす。常陸下総國 各別一題分取詠也若以孔子賦取之時以探得

短冊押紙書和奇云

○きつな。藤原系十七代平清盛のつとみなりと同心とあれど然して、類書纂要九ノ章固

同月老囊中何物月老曰赤繩子以繫夫婦之足雖警家異域此繩一繫終不可違云

長門本平家物語十七卷とてほりてのひきあつと名つらふ云々平家物語七ノ卷十ノ巻に綴と

キツナと訓、盛衰記四ノ巻に紐とキツナ、太平記十二巻七ノ巻に絆とキツナとあり

○つと川。水源筑波郡よりゆく信太郡をなれは筑波郡の流海へ入る

○つと川。日本書紀は澗水とていふとて訓小とていふとて少息とていふとて訓小とていふ

小橋ありとて名つけしとて川とていふとて信太郡若山村より河内郡伊佐津

村へさへ移り此伊佐津村の名も橋とていふとてえられ橋の名よりとて村の名より出

たると名あはすくとていふとていふとていふとて

○すゑたぐり。万葉集四ノ卷者路多豆多頭四待月而行吾背子其間介母持見

○うらひ川。常陸河内郡とていふとて蚕飼川あり此名は詠とていふとて持門記に常陸下総

兩國之堺子飼之渡とていふとて東國戦記に古貝川とあり

○稻後の池。相馬日記に

印幡沼のほとけとていふとて道興

准后ののほの池とていふとて

なりとていふとて和名抄下総國

印幡郡 印幡郷とあれど

訓注あり故に文字は誤り

今世に六とていふとて和名抄

訓例と考ふと因幡國に以

奈ハ、遠江國引佐郡に伊

奈佐と訓注ありとて皆例を

イナと用ふる伊勢國真奔

郡も為奈倍とありとて

井とて井ナと用ひたりとて例を

印幡もイナとていふとて

夫とのおぼと能りともいふと

ホハ通音あれは稻後とて

例多し中昔中世のいふとて

いふとていふとていふとて

印幡植生の両郡とていふと

これいふとていふとて

○郷書。さうぶ都の文あり

李端詩浪裏得郷書

○飛鴻。あふりとて蘇武の

故吏とていふとて毛詩鴻雁篇

九月廿八日稻後のいふとて坊あきぬ水とていふとて

山色湖光殊又窮 郷書曾不託飛鴻

砧聲近報孤村晚 旅懷何堪憂患躬

あまのいふとて國境の事とていふとてありのつとてかよとていふと

雨とていふとて風人よとていふとていふとていふとていふとて

の地とていふとていふとていふとていふとていふとていふとて

刺とていふとていふとていふとていふとていふとていふとて

かやとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて

ほりるとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて

佳人落命荒原上 鮮庭古碑空刻名

勿恨青絲犯花影 浮生有限辱兼榮

白波不浮名とていふとていふとていふとていふとていふとて

その系とていふとていふとていふとていふとていふとていふとて

たの福は移りてとていふとていふとていふとていふとていふとて

たの福は移りてとていふとていふとていふとていふとていふとて

たの福は移りてとていふとていふとていふとていふとていふとて

たの福は移りてとていふとていふとていふとていふとていふとて

たの福は移りてとていふとていふとていふとていふとていふとて

注大日鴻小日雁皆子

曰鴻雁春秋而秋南不其

時云和名抄鴻雁和名加利

○ありなき 和名抄下總

之毛豆 不詳國

○児の赤下総國香取郡

大瀨賀村の乃の産る児塚

あり此近則児の原之合巽

多産あり之里俗児を赤

と云殖生郡の俗をいふ

香取郡の河川規津に

いふものあり鹿島日記

云々あり東國戦紀七ノ所

存間ハ兒子ノ原申之

守義長西大須賀六郎尚

児ノ原ニ謂有ヤト云申上

ハ昔小菅且林寺住持

證上人此處ニ兩屋或時

隣村行日暮テ帰ニ此原

頃十五六ノ童子顔色

タカ立煩居タリ上云脚

未若年日暮及テ何方

者ト見答白某都方者

候処喘息ヲ長ク煩ガ

療治不付故清水觀音

籠リ候所満々夜夢ニ

西大須賀智證下云高僧

尋行ニ血脉ヲ傳テ本

ト告ニ依テ奉候ハ共

一足主引レ哀西大須

五ハ下申智證聞テ其人

法ヲ授テ都ニ帰ヘシ

浴ニ住主也三熱ノ苦

守護神ト成テ氏ヲ可

寺ヲ建号正福寺云云

○白波 盗人の異名、後漢書

波谷為盜時俗号白波賊

他方云、著聞集ニ、今集

足名ハナリ也、古今集

拾遺集雜下登人の

下登人の

田の

或レ下登人を

遊シキ人ナリ

又云

秘傳

或レ下登人の

遊シキ人ナリ

又云

秘傳

或レ下登人の

遊シキ人ナリ

又云

秘傳

或レ下登人の

遊シキ人ナリ

又云

秘傳

或レ下登人の

遊シキ人ナリ

又云

秘傳

或レ下登人の

遊シキ人ナリ

又云

秘傳

或レ下登人の

遊シキ人ナリ

又云

秘傳

或レ下登人の

遊シキ人ナリ

又云

秘傳

或レ下登人の

遊シキ人ナリ

又云

秘傳

或レ下登人の

遊シキ人ナリ

又云

秘傳

或レ下登人の

遊シキ人ナリ

浅草寺傳法院寺領五百石觀音天像檜熊廣成武成ト云三人兄弟漁業ス推古天皇三十六年三月十日官戸川沖網下怪物掛り月影見觀音像則草ヲ結安置其翌年茶川童子十人連朝多ヲ川出是草名多陰ヨリ光明暉露見大悲像ヲ慕テ以テ柱ニ夜堂ヲ結崇奉云云孝德天皇大化元年少内膳海堂塔建立即當寺開山云云和漢三才圖會云天慶五年平公雅為武藏國守建伽藍而以米歷代將軍家修造也本尊正觀音坊舎四十一箇寺東鑑治兼五年條因東兵乱記木下川某師像起文宗收東國記行持ハ傳法院舊記不足之長カレハ略諸國圭并録高五百石余浅草寺

おのりふたふたふたふたの悪業をど敷懺悔悔いさく
今もわがまの悪業をど敷いひゆるさく後世に
いひゆるさくおのりふたふたふたふた
おのりふたふたふたふたふたふたふたふた
おのりふたふたふたふたふたふたふたふた
おのりふたふたふたふたふたふたふたふた
おのりふたふたふたふたふたふたふたふた
おのりふたふたふたふたふたふたふたふた
おのりふたふたふたふたふたふたふたふた
おのりふたふたふたふたふたふたふたふた

○たのむまゝのひ 生のまゝく熟し物とも頷くならん公達、たのむまゝ生きたる女房、たのむまゝ
源氏達生、たのむまゝのなまをたのむまゝのたのむまゝのたのむまゝのたのむまゝのたのむまゝのたのむまゝ
人らも若くともとのまゝ云々俗云々の中はたのむまゝのたのむまゝのたのむまゝのたのむまゝのたのむまゝのたのむまゝ
○抱女 和名抄ノ揚氏漢語抄云遊行女兒和名守加礼女又云阿曾比二云書遊行ノ謂
之遊女待夜而奔其淫奔者謂之夜奔、本朝文粹九ノ見遊女江以言上略其俗天下術
賣女色之者若以提結邑里相望、維舟門前、蓬客河中必者脂粉訝咲以蕩人心云々
匡房卿遊女記あり
○相圖 下学集下ノ約束之義也
○わく 和名鈔ノ釋書曰首、始也和名加守倍
○一生 華嚴經隨疏演義鈔ノ善財童子一生之内、因成佛果云々
○つやく つやく物もえをたつやくとある人などある一切の意たれども此記の詞ハ
つやくひひりつやくとのまゝ日本紀六ノ完又乃不熟又情なまを三ノ代実録ノ切案文
辞情思義理云々これのまゝつやくひひりつやくとのまゝの候写なすべし
○やき 不可思議ナリ、増一阿含經ノ謂世間衆生為從何來復從何起、從此命
終當從何生皆不可思議故云衆生不可思議
○惡趣 天台四教儀集註ノ三惡趣一、地獄道二、餓鬼道三、畜生道云々、大抵陀經四
十八願第一無三惡趣願云願我刹中無地獄餓鬼禽畜以至蜉蝣飛蠅動之類云云
○永劫沈淪 涅槃經ノ五逆罪云如是等人永墮地獄無有出期云云地藏經ノ謂
諸有情墮此地獄從初入時至百千万劫一日一夜万死万生受苦無間故名命無間
○ふたふたふた 被の字、拾遺集ノかつかつかとふたふたふたふたふたふたふたふた

もと契のうきさきさき... 改と改を衝く... 波を瀧とく... 被さる

○発心 釋氏要覽に發心即具出家今考に別教初地圓教初住菩薩為初發心之位

○慙愧 涅槃經に諸佛世尊常說此言有二白法能救眾生一慙愧二慚者自

不作罪愧者不教他作慚者內自羞恥愧者發露向入云云雜阿含經に世間若無

有慚愧二法者違越清淨道向生老病死云云

○懺悔 天台四教義集註に梵語懺摩華言悔過一華梵兼舉故稱懺悔懺名修

來悔名改往謂修將來之善果改己往之惡因是名懺悔云云天台光明云懺者首

也悔者伏也如世人得罪於王伏款順後不敢違逆上逆為伏順後為首入亦伏

伏三寶足下正順道理不敢作非故名懺悔又懺名白法悔名黑法須悔而勿

作白法須企而尚之取捨合論故言懺悔華嚴經に我昔所造諸惡業皆由無始貪瞋癡

後身口意之所生一切我今皆懺悔觀普賢菩薩行法徑に衆罪如霜露惠日能消除

○菩提 翻譯名義集五に菩提摩訶師云道之極者稱曰菩提秦無言以譯之後代

諸師皆譯為道以大論翻為神道故云云

○十一面觀音 又異本に千手とを云とれと今茲に不聖觀音なりとあり秘佛ありハ

聖手ハ拜一がこ

○まの心 浅きふあり待乳山又真土山ともあり聖天を安置す別當金龍山本龍院ありあり

岡山なりゆら万葉集三まの心とを云とれつる所は河のまの心川ありまの心川あり

ありまの心河のまの心あり此のまの心のまの心ありまの心をまの心と云とれつる

つひも及びぬまの心古今集冬巻ありまの心を云とれつるまの心をまの心と云とれ

つひも及びぬまの心

あまの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

○偶田川 伊勢物語に武

蔵の國にありまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

まの心をいふまの心

聖福寺殿、治三十七年、四條大納言隆房卿息大僧正園城寺長吏同第十二世道瑜大僧正
号二條殿、又号如意寺殿、治七年、二條殿普光園院入道関白良實公息前大僧正隆弁
入室受法園城寺長吏云々、大系圖三、関白良實公息道瑜大僧正三井長吏三山檢校
新熊野檢校准三后如意寺隆弁資

○僧正 職原叔下、僧正准彦儀、僧正者有勅使以任之、僧史略、正者政也、自正正
久、克敷、政令、故蓋以比立無法若馬無轡、漸、俗風、將乖、雅則、故擇有德望、
以法而繩之、令歸乎正、故云僧正、盛衰、抄十三、僧正、推古天皇世、二年四月、沙門、芥以祖
父、打殺者、アリ、故百濟國ヨリ貢来、觀勤法師ヲ撰テ任僧正云云、大僧正、聖武天皇
天平七年、行基始任給フ

田園雜記標註卷上終

追加

○菅原 上卷十二、才能登國能登郡、今鹿島菅原村と名跡志を引くハ郡界あれ、隣郡と
はひらるや、國人の祝や、同國羽咋郡菅原、庄菅原村也
○杉の屋 同羽咋郡菅原、庄杉屋村、菅原村の並び
○よの柳 同國鹿島郡四柳、庄四柳村
○小金森 同郡小田中、保小金森村、よの柳の並び
○茨井 同小田中、保藤井村
○ろえのやち 同鹿島郡浅井、庄久江村、同所久江原山下、谷内村と云有これ勿之、此外ハ
やちといふ多し、國風のひらるなり、なま、中谷内村、不動寺村、端幅谷内、宇出津西の
谷内、藤浪村、小又ヶ谷内、鶉川堂ヶ谷内、暮の谷内、鹿島村北の谷内、大津菖蒲ヶ谷内、向田村
明星の谷内、などのおあり、その中ハ、お引くハ、順路ハ合へり、加賀國津幡驛より能登國
羽咋郡ハ入て高松驛、今濱驛、志雄驛、今子浦、吉野屋村、菅原村、杉屋村、飯山驛、下境
村、是より鹿島、境村、四柳村、小金森、高島驛、輪田村、藤井村、小田中村、久江村、二の宮
驛、谷内村、久江原山、石動山といふ道筋なり

久松義久の書信 2冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

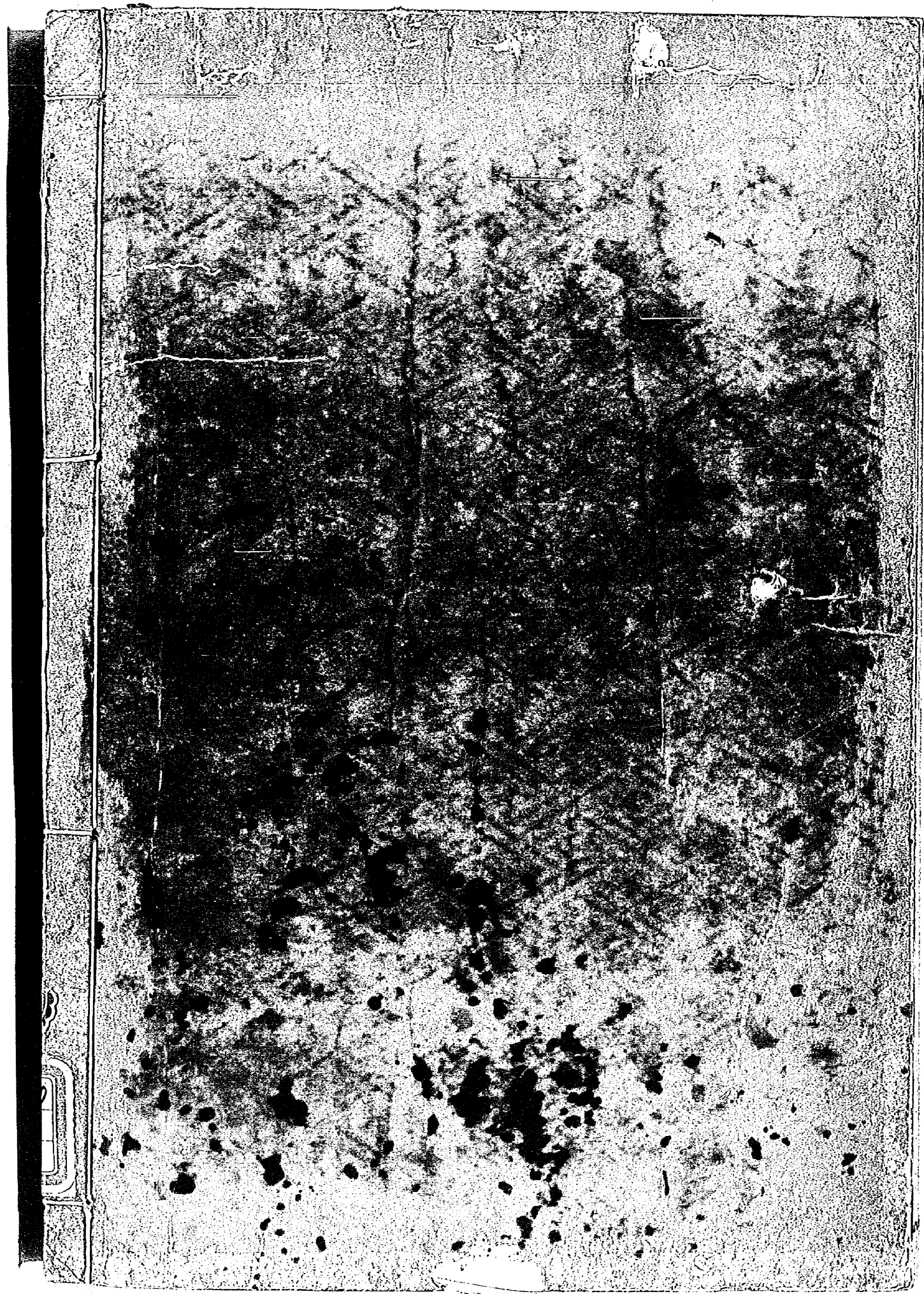
久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

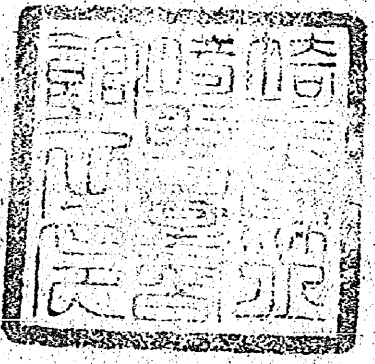
久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊

久松義久の書信 1冊 絹装 1冊



文庫家



岡赤橋前

田國雜記下

關岡野州内標家



○由井より、鎌倉志二小鶴岡赤橋前、鳥居ヨリ四町十五間、大鳥居アリ、又六町四五間、由井濱、大鳥居アリ、三鳥居、西柱間高三丈二尺、石椽、周リ一丈、是ヨリ、文寺、登石ノ長、八間ナリ、波打際マデ五町、東鑑治、兼四年十一月十六日、同建保三十、同仁治三四三同寛元三十九、なぐり、由井、浜大鳥居、のり、北國紀行、梅花、無尽、蔵二太平記十、鎌倉大草紙上、注、北條氏康武蔵野紀行、關東兵亂記、天文廿一年、なぐり、由井、浜大鳥居、のり、○建長寺、鎌倉志三、小巨福山、号、額、天下、禪林、建長、興國、禪寺、五山、第一、相模守平、時頼、建立、關山、宋、大覺、禪師、○圓覺寺、同志、三、瑞鹿山、下、号、相模守平、時宗、建立、關山

由井より、浜のり、大鳥居、三、西柱間、高三丈二尺、石椽、周リ一丈、是ヨリ、文寺、登石ノ長、八間ナリ、波打際マデ五町、東鑑治、兼四年十一月十六日、同建保三十、同仁治三四三同寛元三十九、なぐり、由井、浜大鳥居、のり、北國紀行、梅花、無尽、蔵二太平記十、鎌倉大草紙上、注、北條氏康武蔵野紀行、關東兵亂記、天文廿一年、なぐり、由井、浜大鳥居、のり、○建長寺、鎌倉志三、小巨福山、号、額、天下、禪林、建長、興國、禪寺、五山、第一、相模守平、時頼、建立、關山、宋、大覺、禪師、○圓覺寺、同志、三、瑞鹿山、下、号、相模守平、時宗、建立、關山

宋佛光禪師五山第三
 ○以下の五山 第三、龜谷山
 壽福寺、第四、金峯山淨智
 寺、第五、稻荷山淨妙寺
 ○瀬戸 武藏國久良郡金
 澤、内瀬戸明神、頼朝卿
 ノ時伊豆三島明神を勸請
 祖領百石、瀬戸橋、明神前
 東方、方々洲崎と瀬戸との
 間入瀬、不架、金澤八景と
 云、延宝の、唐土の、以門、東阜
 心越禪師水府公、不召と云、
 此地、不事、彼國の西湖、瀟湘
 の勝景、不似、これ、不、八詩、と
 作、これ、奇、不、生、居士、秘、す、
 洲崎、晴嵐、瀬戸、秋月、小泉
 夜雨、乙、艦、歸帆、稱、名、晚鐘
 平瀉、落雁、野島、夕照、内川
 暮雪、詩、奇、八略、云、
 ○空海、不、著、不、云、云、萬葉

と云、一、庵、下、踐、兼、此、其、云、と、云、と、云、
 謹言、不、信、り、り、久、空、海、不、著、不、云、と、云、と、云、
 其、の、所、に、稱、名、寺、と、云、と、云、律、院、信、り、と、云、と、云、
 中、の、佛、像、不、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 三、重、塔、塔、法、不、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 中、の、佛、像、不、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 二、う、け、あ、草、一、信、れ、不、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 さ、を、信、り、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 既、平、下、向、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 中、の、佛、像、不、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 尚、時、不、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、

集十八、ま、り、の、代、り、の、代、り、
 金、花、依、久、大、伴、家、持、
 ○稱、名、寺、 鎌倉、志、八、小、稱、名、
 寺、号、金、澤、山、真、言、律、宗、南、都、
 西、大、寺、末、寺、龜、山、帝、勅、願、
 所、云、北、條、越、後、守、平、實、時、本、
 願、主、其、子、頭、時、建、也、其、時、
 稱、名、寺、正、惠、号、金、澤、居、住、
 願、時、ヨリ、金、澤、家、号、寺、領、
 百、石、北、條、分、限、帳、金、澤、稱、名、
 寺、領、七、拾、七、貫、文、久、良、岐、郡、金、澤、
 云、云、又、云、百、三、拾、六、貫、九、百、五、拾、文、
 久、良、岐、郡、金、澤、稱、名、寺、分、云、
 ○律、院 釋、氏、要、覽、中、の、梵、云、毗、尼、此、翻、名、律、律、法、也、
 法、平、地、方、善、由、之、生、長、云、云、一、切、佛、弟、子、皆、依、戒、住、
 四、是、佛、法、瓔、珞、能、莊、嚴、佛、法、故、云、云、
 ○伽、藍 翻、譯、名、義、集、七、の、僧、伽、藍、梵、語、譯、為、衆、園、
 摩、五、分、律、云、餅、沙、王、施、迦、蘭、陀、竹、園、為、始、也、
 僧、史、略、云、為、衆、人、園、圃、園、圃、生、植、之、所、佛、弟、
 子、則、生、植、道、芽、聖、果、也、

あ、つ、ゆ、を、か、き、く、禁、制、一、信、り、松、老、経、廻、の、義、也、
 例、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 長、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 つ、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 の、の、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 の、の、威、然、今、更、肝、の、信、り、と、云、と、云、と、云、
 の、の、世、に、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 の、の、世、に、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、
 の、の、世、に、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、と、云、

○塔婆 釋氏要覽云。梵語塔婆。此云高頭。今略稱塔也。後分經云。佛告阿難。佛般涅槃。茶毗既訖。一切西來。收取舍利。置七宝瓶。當於拘尸那城內。四衢道中。建七宝塔。高三十三層。上有輪相云云。

○楊貴妃 長恨歌云。楊家有女初長成。養在深閨人未識。天生麗質難自棄。一朝選在君王側。回頭一笑百媚生。六宮粉黛無顏色。雲鬢半偏新睡覺。梅花無處藏二小。珠簾猶兒與竺群書之目錄。有水晶屏。無不著。而不能觸目云云。

○住持 今世寺のあり。そのいふに。住持なるを特用せし成へ。住持といふは。仏法を信託せし衆生に教へ。授て如来の心印を世界に住せしむるもの。知識の住持まゝなるもの。祖庭事苑云。昔靈山住持以大迦葉統之竹林。住持以身子尸之故。聖人之教。盛聖人之法。長存云々。空華集十三の吾祖百丈大氏。創禪刹安衆。設東西兩席。曰頭首曰知事。猶朝廷置文武官。其才宜文者。相之。宜武者。得之。而又統其衆者。曰住持。住持之職。尤為難矣。事具百端。應接弗暇。則於是置侍司。以代其勞。猶朝廷近侍之職也。

○水精 和名抄百五十三。水精兼名苑云。水玉一名月珠。和名美豆。止留太萬。水精也。孫海の各地方云々。水玉一名月珠。和名美豆。止留太萬。水精也。孫海の各地方云々。水玉一名月珠。和名美豆。止留太萬。水精也。

○孫海の各地方云々。水玉一名月珠。和名美豆。止留太萬。水精也。孫海の各地方云々。水玉一名月珠。和名美豆。止留太萬。水精也。

山清淨光寺時宗本寺宗祖
一遍上人。豫州住人。河野七郎
通廣二男云。出家登嚴山。受
戒。日逢西山良峯。善惠上人。本
願念佛法。內經二十一年。改名
知真房。詣熊野行住。聖臥
念佛。稱名無他。通夜本宮。護
殿。折衆生利益之因。時愛推
現。現曰。切衆生以字宗。字聽
聞。稱名。則皆為佛。種宣教。北
之乃授之言。四句偈。六字名号。
一遍法。十界依正。遍體石行
離念。一遍證。人中上妙。好花
邊。竟書其偈。則其字當矣。十
石人也。弟子曰。他何。亦陀。佛
隨身。西東。東與都。鄙。遠。近
回國。若以男女。普授。與之。此下
文。到相州。藤澤。云々。とある。其
誤之故。今改。書。り。到相州
當麻。道。場。字。當

水玉一名月珠。和名美豆。止留太萬。水精也。

○まろし川 相模國足上餘
 綾而郡の境を流るる川也其
 酒か村といふ者此酒か川
 とも云十六夜日記にまろし
 川と云川をいふこと有り
 後さるとまろしとすといふ事
 ともいふ事、東鑑に同
 十九、平家物語に我物諸七
 同九同十一など云れは川を
 盛衰記三十七まろしと川
 けれと云はるるありたり
 かりありといふ事有り
 鎌倉殿

○まろし川の新撰六帖云
 法師之著書のまろしと云
 由事此まろしはまろし
 衣笠内大臣音釋書言字
 考は條懸ハ修験者服俗
 謂袈裟^{スカケ}為^マ一^マ諺^マ人島
 草子^ママ^ママ^マのまろし引

まろし川

まろし川は相模國足上餘綾而郡の境を流るる川也其酒か村といふ者此酒か川とも云十六夜日記にまろし川と云川をいふこと有り後さるとまろしとすといふ事ともいふ事、東鑑に同十九、平家物語に我物諸七同九同十一など云れは川を盛衰記三十七まろしと川けれと云はるるありたりかりありといふ事有り鎌倉殿

○まろし川の新撰六帖云法師之著書のまろしと云由事此まろしはまろし衣笠内大臣音釋書言字考は條懸ハ修験者服俗謂袈裟為一諺人島草子のまろし引

つらひひ云々
 ○あひひのつ まろし川の
 縁由之説あり、蹴鞠略記が
 傍身鞠者藤懸衣笠衣之
 鞠也綫貫而流公縮躰而
 列出矣、成通卿は傳は裝
 束事おを袴袴袴ハ答の
 衣ハハハハハハハハハハハ
 ○まろし川の浦 相模小田原北
 南辺 早川村之川、水原着根
 山上の湖あり、成は早川といふ
 仙石系、旅倉、塔の塔、を
 色湯取、火の坊あり、有る
 須雲川をいふ、小田原と早川の
 間、海入る、早川といふ
 十六夜日記が着根云々、藤原
 川と云川あり、藤原の湯板を
 云々、早川は藤原が川、
 早川の水安嘉門院、早

つらひひ云々

○あひひのつ まろし川の縁由之説あり、蹴鞠略記が傍身鞠者藤懸衣笠衣之鞠也綫貫而流公縮躰而列出矣、成通卿は傳は裝束事おを袴袴袴ハ答の衣ハハハハハハハハハハハ

○まろし川の浦 相模小田原北南辺 早川村之川、水原着根山上の湖あり、成は早川といふ仙石系、旅倉、塔の塔、を色湯取、火の坊あり、有る須雲川をいふ、小田原と早川の間、海入る、早川といふ十六夜日記が着根云々、藤原川と云川あり、藤原の湯板を云々、早川は藤原が川、早川の水安嘉門院、早

郡、須山口、須走口、甲斐都留郡、吉田口等也。此順路を考ふるは須山口をともむ口と写誤るゝ
ゆん此登山口ハ神職御師などゆゑの多きなる所なれば、須走口の誤るハ須走口ハ富
士山の東口也、須山口ハ南口之須走村と村山とあるあり、次に村山あれば、須山口なるべし、駿河
名勝志中社ハ駿東郡須山村同村富士南口須山口なり云々

○古のヤマ秋はれ 古今集秋下多ももをるれと云々の此はの書を私多りき之を
○富士のむら山 駿河草一ハ富士山大宮口より一里程登りて村山とあり云々、西道行囊抄
四中四ハ村山村此所ニ大鏡坊池西坊辻之坊トテ富士詣先達山伏住ス三坊ニ寺領二百石ノ
御朱印アリト云、神社主田録ハ富士本宮領ノ外ニ村山浅間領富士郡九十五石二十池西坊九十
四石四斗辻之坊十六石六斗、大鏡坊、惣國風土記ハ富士郡村山公親無正税云々村山神社云々

○田子の浦 後河國卷末
富士郡小豆リク海辺をへく
田子の浦へ、万葉集三ノ世田
益人大夫任土總國司時至駿
河澤見崎作歌二首ノ内ノ
晝見騰不飽田兒浦大王之
命恐夜見鶴鴨同三ノ世山
部宿祢赤人望不盡山歌の
反歌ハ田兒之浦後打出而見
者真白衣不盡能高嶺介
雪者零家留、駿河草上ハ

田子浦の浦をへく
富士郡小豆リク海辺をへく
田子の浦へ、万葉集三ノ世田
益人大夫任土總國司時至駿
河澤見崎作歌二首ノ内ノ
晝見騰不飽田兒浦大王之
命恐夜見鶴鴨同三ノ世山
部宿祢赤人望不盡山歌の
反歌ハ田兒之浦後打出而見
者真白衣不盡能高嶺介
雪者零家留、駿河草上ハ

菴原郡與津宿の東のれ
より富士川の濱まをりて田子
の浦と云々今富士郡海畔近
郊ハ田子といふ在り、駿州
名勝志中ハ富士郡小須濱ハ
田子といふ村あり云々、東道行囊
抄十二ハ澳津、御井間此田子
ハテ田子浦ハ内也但此田子
トサテ云所ハ伊豆國ニ田子
村アリ此入海ノ向ナリ云々同十
七ハ自江戸到撰州大坂浦傳
船路、條下上略伊豆國和布良
ニ重洋若地ニ荒利ニ重田子是
伊豆田子菴村ハ事ナリ七十五里
志摩國鳥羽湊ニ到此云々續
日本紀天平勝室三年三月駿
河國守云々於部内菴原郡多
胡浦濱ニ獲黃金ノ賦云々
○予ハのなる澤ヲ葉集上ハ
駿河國歌佐良良久波多林ハ

菴原郡與津宿の東のれ
より富士川の濱まをりて田子
の浦と云々今富士郡海畔近
郊ハ田子といふ在り、駿州
名勝志中ハ富士郡小須濱ハ
田子といふ村あり云々、東道行囊
抄十二ハ澳津、御井間此田子
ハテ田子浦ハ内也但此田子
トサテ云所ハ伊豆國ニ田子
村アリ此入海ノ向ナリ云々同十
七ハ自江戸到撰州大坂浦傳
船路、條下上略伊豆國和布良
ニ重洋若地ニ荒利ニ重田子是
伊豆田子菴村ハ事ナリ七十五里
志摩國鳥羽湊ニ到此云々續
日本紀天平勝室三年三月駿
河國守云々於部内菴原郡多
胡浦濱ニ獲黃金ノ賦云々
○予ハのなる澤ヲ葉集上ハ
駿河國歌佐良良久波多林ハ

緒娶可聖古和良及成和良能
多可神多奈流佐波能其登、
袖中抄七の頭耶云平のち海
とる平の山の雲が泥のよと大
きあり海あり水と氷と相劇
もとありと水氣と相和り
立の海も氷と氷のよと氷は
も氷も氷と氷のよと氷は
中平の海外中も氷と氷のよと
のよと氷と氷のよと氷は
鳴海と氷あり云々

此ありてあまひにわたりて
後道の事と云はれしり
天の事と云はれしり
ゆりてと云はれしり
地ありて海にわたりて

○天の川瀬 張華博物志云天河與海通海濱年々八月有浮槎往来不失期博望侯張騫乃
多費糧食乘槎而去忽不見晝夜奄至一處見城郭屋宇望室中多見織婦見一丈夫
牽牛諸次飲酒問之此人何由至此騫乃問此何處答曰可往蜀問嚴君平乃如其言君
平曰某年月日有客星犯斗牛即改到天河也云云

○三徳の八海 延喜式神名帳駿河國菴原郡御徳神社駿河志云三徳有度菴原二郡跨
有度郡折戸村矢部村近き東南へ一里餘幅二十町計差出た地也府中ヨリ三里今世三徳神社
所ハ有度郡ニテ三徳村の漢家が皆属菴原郡云云考ふる東ノ伊豆國多知ノ西ノ三徳松原
さびたれと此の八海也田子の浦ハ惣名其中ハ神津清見浮島原などの名あり東遊
行囊抄十一ノ三保松原方五里東遊日本無双異地也此地野馬冬三保明神社領百石社前

羽衣松又衣掛松ト云有テ延喜庚申ノ風波ニ失テ今ハ無ト云ノ推書漫筆一ハも三徳の考
あり方角抄ノ神社考ノ神社塔家本朝事跡考ノ其外諸書ニ云々

○浮島の海 假名水脈と三徳と違へり新古今雜中杉原の浦と松の多と云
あがむれハ松と云はれしり

○浮島の海 駿河國富士郡駿東郡不直れと今略して原と云驛これあり万葉仙覚抄ハ
富士足高両山の間昔ハ東海道ノ驛路ナリ横走の関ハ此ありハ也云々此道を昔旅人を
なる重服觸櫛の者も通りたりと草高明神原を今ハ今の浮島原とのや南海の中
不波やれと有るを打寄とせ今ハ道の如きはなりと古老ノ傳へたり云々此説はけり
記やうなれども古昔の風土記などの文不修ハハ所難ハ云々此外也と諸書ニ云々
をかり駿州名勝志中駿東郡浮島原ハ今の原驛より吉原のありて浮島原云々

○たの山 相模足上郡ハ駿河國界にある山なり一山ハありて菅根山と云々

足柄山の内ニ故ハありの八重山と云あり但足柄山と云々昔の官道筋ハ矢倉
嶽のるを竹の下あり関奉へ越る筋ハ関ハ矢倉嶽ハあり古道ハ仙覚抄ハ足柄の山あり
也々富士山の裾を過り清見ノ関ハ切ら道と云々横走の関有たり此道と云々
足々の清見ノ関ハ切ら道と云々横走の関有たり此道と云々
沼津の間菅原川あり北へ入る遇澤竹の下足柄関本と云々東鑑建長四年三月
中務卿親王關東御下向廿九日晝船澤夜関本云云箱根の官道と云々ハのり
定々道あり云々或書ハ元明天皇の和銅七年ハ云々万葉七ハ足柄の
箱根云々同十四ハ云々云々十六夜日記ハ盛衰記四十五卷宗盛

下向なり箱根跡と同四十七は足柄の山をこえはるるなりとの説も上人の定むる根こそふてを
上らんと存れは云々此頃ハ兩道のつぎをさしおりのなり

○山梨山 相模足下郡あり東海道筋あり北の方相模山田あり同國府津より十町半
入る沼代村と曾我別所とのありある峰は此山のうしろを劔澤といふ、曾我物語六は曾我と
中村の境あり山彦山の峰云々同十二中にもいふる我より大磯まであり中村通りをまれば
此山よかきなり也

○古今恋一 おもひくよまらんおふれたのこころぬゆをあつととをいふ人ありと
つぎのあはれ人といふことごとくおのれをこころにまきまきおのれをいふ人ありは、山彦ハ山靈といふ考よ
山よむくことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
おのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
おのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
おのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく

○之り成道は口信云々入りの事その足るのめおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
感一優よふゆ云々、蹴鞠略記五段は帰足者鞠懸背之時立廻也或有不期而帰或有落
通而帰或有躍揚而帰或有立踵而廻懸左帰右懸右帰左依境隨便也、楚鞠簡要
抄は帰足の事入りの足はさしひきまをたてておのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
しとあらはれ云々、おのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
おのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく

○やうこととて里 相模國大住郡八幡村ハ相模川の西わく平塚驛の東あり鶴峯山ハ
幡宮、考ふ諸國ハ國分二寺と八幡の八幡宮と安國寺とのあり此中國分二寺と聖武

天皇の御代草創なり、國史ハ云々、安國寺ハ足利等持院殿の建られり、空
華集、梅松論云々、八幡ハおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
源家崇敬の神あり、六十餘國ハ祭られり、おのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
太宰の主神阿曾麻呂勅を奉て五畿七道は祭ると云、又一説ハ天長元年九月和氣朝臣
清麻呂の男真綱ハ勅を奉て諸國ハ祀としたり、神社書田録ハ相模國大住郡八幡庄ハ
幡領五拾石余別當光岡坊、東鑑十二幅あり、此は、八前の後傳の次なり、入る
よは順路なり

○有の山 公事根源集釋中ハ石清水臨時祭三月中日、次の日還立の儀有南祭を
御あはれとて、おのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく

○つら海 相模足下郡曾我の山彦山の北よりあり、郡の東の方之、相州兵乱記三ハ
曾我故里ノ劔澤ノ藤ヲ見テ各々打ッテ鞠子川ヲ打渡リ成田飯泉ヲ過テ大友ニカ、リテ助
成時宗カシタテ曾我ノ里ニ至リ劔澤ハ藤ヲ詠ハ滝ノ本ニ寄リテ海ハおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
おのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
本朝俗諺志三ハ相州上曾我下曾我中村とつたて、昔祐信の住居の地之、城前寺、禪宗此
寺ハ祐信夫婦成時宗の影像并石塔あり、後ハ山あり、昔ハ登れハ草堂あり、此所方
二十間の石平あり、砂地ハおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
旋風のとく、おのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
おのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
おのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく
おのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとくおのれをいふことごとく

ついでに... 東遊行囊抄十三不國府津ヨリ飯住、
劍澤 景地ナリ毎年三月三日塚原、園木、足柄山至道筋也
○ 蓑笠の森 松蔭隨筆小此森今ハ蓑笠の森と云足柄上郡下井口村あり別當ハ本山
修驗あり上井口村に住リ 井口村ハ足上郡也 相模國人の説ハ昔ヨリ此所ヨリ四月朔日農具を
賣買せりありあり中ハ蓑笠と云ふ多ク持せりむすむ故本抄ヨリ蓑笠の森といひ
一とのありん今ハ村をいひ蓑笠の森といひ云々

○ 下河橋 相模國大山の麓子安村より大山入口の所相鳥居あり其邊を三つと云
今も小橋二つなりけり又大任郡津村より大山あり大山南西の麓蓑
の辺ありなると四十八瀬川と云川流急なる所津村あり其邊を三つと云
日而小三つの橋あり此川の末ハ花氷川といふなり

○ 大山寺 相州大任郡の
てハ愛甲郡也不知なり
東遊行囊抄十五不阿部利
山 兩降山 五大院大山寺号ス
不動明王、靈區也別當ハ大
坊云々、大山縁起文ハ大山住
餘綾、愛甲、三郡之間云々天
平勝宝年中、良弁僧正開基
延喜神名式大任郡阿夫利

宿相州大山寺寒夜無眠而雨寂之餘和漢兩篇口辨
蓑笠何堪雪後峰 山隈無舍倚孤松
可憐半夜還鄉夢 一杵安驚古寺鐘
此山と云はる金山といふ寺あり其山ハ金山といふ
此山と云はる金山といふ寺あり其山ハ金山といふ

神社、考ふるハ當山東表口子
安村あり登山前不動まき社
八町坂路是より本堂奥不動
まき十八町坂路之夫あり山頂
石尊大権現社ハ峻路廿八
町良弁僧正開基祭神大山祇
命也又大山と云ハ大山と云ハ
又ハ大山狗ハ天狗の社有常
中々參詣せり六月廿八日
より登る也初山と云七月朔日
七日まきと云七月廿七日
登山のまきと云一十月廿七日
より十七日まきを金山といふ
越六月廿八日より七月十七日
まで絶頂を登り群集大
方あり此山ハ不動あり
上ハ女人を禁じ又常夜不動
堂あり此山ハ不動あり
峻路ののりハ別當
八大坊真言宗修驗坊會十

ゆくゆくハ... 日向寺といふ山あり一杵安驚古寺鐘
山隈無舍倚孤松
可憐半夜還鄉夢
此山と云はる金山といふ寺あり其山ハ金山といふ

八院卿師家百五十餘字又

纂三村方裏登山口より修

驗十五字あり寺社領和漢三

才圖會六十七卷三百石と

諸國主齊録中百五十六石

大住郡大山寺八火坊と

を餘八山中境内の

北條分限帳大山領百七十八

貫四百六十七文中郡高森郷

名寄とありとあり

本の中

なり夫木

○附寂 説文寂無入声也

廣韻寂靜也安也音願

體之云為山陰會書音無

門塔兩寂務簡而政理

○靈山といふ寺本多茶師日向寺

大住郡日向村の上やく大山より北に

日向云く同建久五年八月

於當國効驗無雙之間思食立云云

和名抄相模國大住郡日向郷

和漢三才圖會六十七相模

國日向藥師寺領四十石唐佛十二神アリ云々

相模家集とて日向の山を

寺北條分限帳日向茶師領六十貫

三百文中郡日向伏、天山とも

又鷲峯山とも鷲山とも

國とありハみか靈鷲山の略也

伏華経に常在靈鷲山云云同抄

世尊於于灵山會上為諸

大衆説経天龍八部咸悉歡喜

翻譯名義集三不著間嶋山大論

云著間名説嶋嶺名頭

此冥とありとありとあり

栢とありとありとあり

ありとありとありとあり

深夜を月

松雪夕深

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

思不言志

戸を多しと云ふ事と云ふれども武蔵の平元古跡を考へれば武蔵演路、武蔵野地
名考、四神地名録、武蔵野誌等皆小山田の案に依りて記されしものと云ふべし往古の案
の例を考へて只小山田村の推量の説中、武蔵地名考の東鑑太平記
中も案を引られし小山田の案を引られし小山田の案を引られし小山田の案を引られし
関戸村ハ鎌倉治世の頃軍防の爲に玉川の流を要害と取て置れり此説ありと云ふ
職貢令ハ関刻義解ハ謂依律関者檢判之處刻者壘柵之所是也とありて関ハ國界に
例刻ハ軍防の料と云ふ訓ハせり故に通リて関の字を書き置れども地理より考へ
そのべき多し、和名抄關日本紀私記ハ関門和名世岐度在境所以祭出禦ハ東
鑑建曆三年十月為武蔵國新関実檢被遣云云等同元文二年六月関戸大将軍武部
丞時房和田左衛門尉義盛也、同建保二年二月仰諸國関渡地頭可被正旅人順云云
履云云、小山田の案考ハ長久保ハあつて子種の名に注ス

○多摩郡府中の北十八町中、國分寺あり此辺は古く窪村とあり武蔵
演路五ノ多摩郡多摩窪村ハ古く窪女ありと繁昌の地云、島山重忠ハ窪君の自
殺せし地と云ふ古本あり傾城社と云ふ今ハ松の本ハ八幡の小祠あり云、安南考ハ此地府
中と云ふるを考へれば、昔府ハ國司ありて一國の政事を治りて頃ハ府中の人家も多
建つて居る未ハ傾城町のあり地あり、武蔵野誌ニハ鎌倉治世の頃北國より鎌倉への
通路のよりと云ふありて府の國司も地又鎌倉將軍家も治世となりてを斷る衰廢七
此雜記の頃ハ曠野の孤村とありと云ふれハ今の民家と同ト云ふ、師門物語下、妻の
名を慕ふ事ハ然ハ窪ハ其の山云々
○いんこをけ 万葉十一と窪ハ山の石穂菅云云一云石小菅、窪ハ窪ハ菅ハ

○むしをり 武蔵入間郡宗
岡村、北條分限帳ハ入間郡棟岡
○ほりうみの井 武蔵野誌ハ
堀兼の井ハ入間郡堀兼村と云
其地の名も浅間の祠ありて
側ハ埋井ありと云ふ堀兼井と
云側ハ石碑有、古今六帖ニ
むしハあまの井比を云
むしハあまの井比を云
むしハあまの井比を云
むしハあまの井比を云
武蔵名所考ハ堀兼の井ハ
入間郡の名所なりと云ふが
なれと云ふ旧説と定むるが
加らん余ハ此の井ハ堀兼
堀兼村ハ入間郡堀兼村と云
十に云あり堀兼の旧説ハ
武蔵野の中央ハ平の地ハ
井を堀と云ふるが水と云
ぐハ堀兼村と云ふ事ハ

むしをり
堀兼の井ハ入間郡堀兼村と云
其地の名も浅間の祠ありて
側ハ埋井ありと云ふ堀兼井と
云側ハ石碑有、古今六帖ニ
むしハあまの井比を云
むしハあまの井比を云
むしハあまの井比を云
むしハあまの井比を云
武蔵名所考ハ堀兼の井ハ
入間郡の名所なりと云ふが
なれと云ふ旧説と定むるが
加らん余ハ此の井ハ堀兼
堀兼村ハ入間郡堀兼村と云
十に云あり堀兼の旧説ハ
武蔵野の中央ハ平の地ハ
井を堀と云ふるが水と云
ぐハ堀兼村と云ふ事ハ

又どは新田地と村を堀
兼と名づけハるるハ世の
より定ハる事ナリ此

○三井戸今堀兼の井の辺に
此名きを依多摩郡よ
井戸宿あれと云道遠
と一彼地の百姓の此地を
登りて里をうつりも

○やせの里から系多まは
笑をもとけけりゆの
やせの里云々新積古今
大石は仍とけけりゆ
やせと云りゆるゆを

上州安中到了相州大磯路
條高萩根岸此辺ヨリ左

口ハ津山にありハ侍ハ侍
さゆなることハも
といふハ侍の侍ハ侍

とも詠ハ侍ハ侍ハ侍
南歸北去一李蘭

露宿風食總不安
贏得行吟乘詩景

千峯萬壑雪團
客裡斷腸何時是

西山月落曉樓鐘
吾鄉萬里隔音容

一別同遊夢不逢
客裡斷腸何時是

西山月落曉樓鐘
吾鄉萬里隔音容

一別同遊夢不逢
客裡斷腸何時是

西山月落曉樓鐘

○この後川 和名抄入間郡 武蔵名所考入間郡は入間川村あり河越の西南二里餘あり
村ハ天神の社あり昔在原業平朝臣此地に奇を詠れあり業平天神と称して云々ありハ
此社菅神ゆりて草平の霊を祀るなり又入間川村ハ近世新開き川ハ依て名
つけらる地なれば古の入間の里とい異なり河越の南ありり入曾村と南北二つ別れらる大
村ありるとる草字作修れば誤るべからず安浦あり入る郡の郡家あり郡中の
祖郷なれば入祖村と云は後ハ入る郡は入る川ハ推父郡子權現の南の谷
よりゆる高麗郡落合村より畑川ハ合入る郡は入る川と云は比企入間表郡の
界を流れ荒川ハ入り隅田川とゆるゆあり武蔵演路ハ入間郡中央ハ河越城也中古
入東入西郡と云へり入間川村南あり古入間河と云へりハ河越城也今昔と云へり
中と云へり右と云へり右と云へり右と云へり右と云へり右と云へり右と云へり右と云へり
物後五のの川ハ右と云へり右と云へり右と云へり右と云へり右と云へり右と云へり右と云へり
紙上豆相記なりと云へり

○佐西の記に云々 武蔵演路ハ高麗郡條井村觀音堂本山修驗滝音山白石寺寺領十石
大同年中建立と云々此條分限帳ハ高麗郡條井

○一李蘭 字景本李古年字關晚也蓋也

○露宿 淮南子道應訓ハ武王伐紂舍露宿以示平易解劍帶以示無伐後漢書王渙賣人露
宿于道云々魏志杜綫傳註ハ樹下晉書謝幼度傳ハ草行也

○贏得行吟 廣韻ハ音麻益也增韻ハ得獲也凡求而獲曰得字書ハ吟古吟字ハ
記月令注ハ贏猶解也云々井岡氏云贏得自分自定と云へりハ唐杜牧詩

ゆたけの後進歩
嘉
九寸三分

別後切意
九寸六分

時後忠茂准攝政
七月
十五坊

武州内
十五坊

武州内
十五坊

武州内
十五坊

峻險 字書峻峭也最急也說文險阻難也廣韻險危也
波瀾 說文大波為瀾小波為瀾白氏文集豈無要津水咫尺無波瀾
凍雞 宋鮑照賦感寒雞之早晨憐雙雁之遠漠

○大石信濃守 大石氏系譜朝日將軍源義仲七代後胤木曾讚岐守家村二男信乃國
佐久郡大石郷居住信重 遠江守 憲重 石見守 憲儀 源左衛門尉 房重 源左衛門尉 頭重 信濃守
定重 源左衛門尉 定久 源左衛門尉 氏照 陸奥守 源三 定仲 源左衛門尉 播磨守 直久 越後守

右家譜遠江守信重後武州千手山住石見守二宮住信乃守時武州多西郡高月居城後
移滝山城云々梅花無於藏萬秀齋詩序武藏目代大石定重請之余益三圖其亭八王子滝
山城主云云武藏刺史之幕府有爪牙之英臣是曰大石定重也木曾義仲十葉之雲孫也武之
二十餘郡悉屬指呼云云本朝三國志世三三木曾左馬頭義仲後胤大石源左衛門尉定冬云
者了り教代武藏國滝山城主三上杉老臣有為方氏康三屬之後氏照ヲ智トシ跡ヲ譲レル也
氏照初在名ヲ呼テ由井由井領也源三下号シ丸力後大石ヲ改テ北条下号セラル居城滝山各城
ナレ滝山六落ルト云事ア六旁禁忌ナリトテ此八王子ニ移サレシカトモ武運既ニ尽テ落城ニ及
コソ薄情ケク廢城考ノ上杉長臣大石源左衛門尉定久居城滝山云々上杉滅テ定久氏
康ニ降參ス永祿中北條氏康ニ男北條陸奥守氏輝 始由井源三氏照ト云 滝山城ニ籠ル天正十八
年前田上杉毛利真田面々此ニ向ニ然ニ責取云々北条五代記東國太平記関東古戦録由
大石源左衛門尉定久入道道俊木曾義仲未流云々惣而武藏國ノ目代ナリ信重ヨリ定久
ニ官領上杉家老臣ニテ天文ノ初小田原ニ屬シ直久以時天正十八年五月豆州獅子瀨城ニ
於テ滅亡云々この苗裔今の大石千引翁ニルル北條分限帳大石信濃守領六貫文武
州平澤内金剛寺分
○高閣 遊仙窟ニニカカトヤ和漢音釋書言字考高樓觀閣說文樓重
屋ノ古事記仁德記高臺和名抄樓辨色立成云太加止乃續日本紀二西高
殿ノ万葉集一ノ芳野川多藝津河内高慶乎高知座而云々

昔、夫婦の枕をのれをさか
今、夫婦の茶碗をのれをさか
なれを今、茶碗をのれをさか
茶碗ののれをさか

○屏風 華文類聚二百廿
一、天子黃屋而立、去、屏
風也、釋名、屏風障風也
屏在後、所以依倚也、白居
易屏風、諸素屏、素屏、乳
為乎不支、不飾、不丹、不青、
同、寫真圖、我肯三十六寫貌
在丹青、云云、下、學集、下、屏
退也、即退風之義也、延喜式
五、屏五尺、屏風、和名抄、頁
十七、屏風、西、京、雜記、云、七尺
屏風、屏音薄
○銀錢工 錢字、字、一、錢
字の誤寫なりと考へ

○扇 和名抄百七十八、四
聲字苑云、扇、風也、和名阿
布岐、兼名苑云、扇、一名、篋、
古今注、小、舜、廣、嗣、祝、聽、作
五、明、扇、云、之、外、仁、風、便
面、雉、尾、扇、六、角、扇、奔、紕、
七、宝、扇、輕、篋、蒲、篋、障
面、など、名、多、し

○骨 九相詩、昔、斯
朝、帝、紅、顏、去、今、則、郊、原、白
骨、入、東、坡、居、之、和、漢、朗、詠、集
小、朝、有、紅、顏、誇、世、路、暮、為
白骨、抄、郊、原、義、孝、朝、臣
○零落 韻會、九、草、白、零、
本、曰、落、云、落、字、草、句、小、書、と、
琵琶行、小、門、前、零、落、鞞、馬、稀、
唐、盧、照、隣、詩、節、花、零、落、盡、
天子、不、知、名、白、氏、文、集、十、小、
賢、愚、共、零、落、貴、賤、同、埋、沒、
○人間生滅形 涅槃經、入、余、不、
停、速、如、山、水、大、經、獨、小、
諸、行、無、常、是、生、滅、法、大、智、
度、論、四、十、三、小、謂、一、切、有、
為、之、法、念、生、滅、而、不、停、住、
故、名、念、之、無、常、
○八苦 涅槃經、十二、小、生、苦、
老、苦、病、苦、死、苦、愛、別、離、
苦、怨、憎、會、苦、求、不、得、苦、
五、陰、盛、苦、
○身肉代之乃至盡命 命云云

雪の中、鷹、狩
池水鳥
空夜、悽然、獨、濕、衣
洛陽、千里、信、音、稀
初、秋、涼、意

月花雪
初秋涼意
空夜、悽然、獨、濕、衣
洛陽、千里、信、音、稀
初、秋、涼、意

つらぬき一 前室治郎百首寄鳥恋これ推してつらぬき一の多くさめおれやあつひの地と
助く人 後九条前内大臣基家、義楚六帖世三小鴛鴦亦名匹鳥相隨不相離入得其一則一思而
至死云云、千五百番奇合と抄けしやつらぬき一これおれしうはあつひの毛を隆信

○かこりれ月 八雲御抄三上月の都かこりれ言塵集四かこりれ月八半月也、和漢音釋書言字
考半半月、半輪、半規、並全、唐詩小峨眉山月半輪秋、夫木抄十三色うらまひ曉のかこりれを
考半考ある月の影うら信実抄片、上柱弓張月の夜をもえ合る

○このせ川 此記上、福立山の下は流あり
○るね 一のこをねる
○悽然 説文悽、痛也、李白詩美人結長想、對此心悽然
○洛陽 帝王編年記十二小延曆十五年正月十五日始造平安城、東京愛宕郡謂左京、唐名洛陽

西京葛野郡謂右京、唐名長安
○この花 琅邪代解編一、小草木之花皆五出雪花獨六出莫喻其理、朱文公謂地六水之成、教
雪者水結為花、故六出云云、古今詩話天上瑞木花六出注雪、章孝標春雪詩六出
花飛、處を飄、粘窓拂砌、上寒條、うらまをその上うけらるる六葉のうらまをたよる

○おそくや 万葉集三あつひのひりてくれぬをの夜渡月之かこりれを
○細人のうけ 和名抄百九十四小、後子蔭勅切韻云後子釣別名也、漢語抄云字介今案網具
又有此名故別置之

○まをそれほのめりつ 万葉十まをの入聲のまを初尾花云、後拾遺恋一まをれ乃
まをふたを、まをほのめりつを平徑章終尾
○嘯吟 説文嘯、吹聲也、或作歎詩、其歎也、歌云、篋、感台而出声、宋之間、吾生抱

忠信、吟嘯自安間

○沈々 史陳涉世家、故入
見宮殿惟帳、日影傾、沈々
沈沈沈沈、注云深遠貌、白氏
文集八、索々風或寒沈沈、沈沈

○詩神 金門歲節に
賈島嘗以歲除取一年
詩、祭以酒脯、曰勞吾精神
是以補之、唐杜甫詩詩成
覺有神

○偶作 偶々、廣韻、通
然也、白氏文集五、遊秋山、獨
題三韻、云、此記下十七、可
た多々の注え合る

○百花鮮 舒元與序、重
雪終日玉花攬空、事文類
聚、到江還、作冰著、木漸
成花、唐高正臣詩、柳翠金
煙葉、梅芳帶雪花、韓愈

煙葉、梅芳帶雪花、韓愈

抄の 寄坊ゆきゆき始をこる嘯吟

寒燈挑盡夜沈々 獨臥空牀思不禁

為我詩神如有感 松風生砌助愁吟

雪落ありあけ糸乃高閣心のありく偶作

危樓朝上百花鮮 交友無憐詩酒遠

此地逍遙似何處 亂山疊嶂雪蟬娟

十五の月十の仙とてこの連糸ふたをゆりて切ら

きりしゆのこもる人のあつひのあつひのあつひ

待日終るあつひのあつひのあつひ

人々まをるあつひのあつひのあつひ

在る川流のあつひのあつひのあつひ
悠想永

詩白雪却嫌春色晚故塞
庭樹作飛花

○逍遙 莊子逍遙遊注

逍遙言優游自在也晉潘

岳語修日期月携手逍遙

楚詞抑若木以拂石兮聊

逍遙以相半日本書紀西

行逍遙於郊野云古今集

四川せうをういさ伊勢

物語源氏物語なとも音

音語せうえうとつひを

○をるな川 遠江國濱名

郡の名所也昔々湖あり

これあり大海へ流る川の

明應八年の大地震あり

此と大陽とあり流れて入海と

なり一なる今切と云く川ハ

絶えり遠湖記不瀆名川ハ

帯の候へる湖水靜あり

少々の候へる湖水の候へる

たうりなる云い

○やぐの 万葉集二不

難余考云と足るれか

難の意やんまの同表ハ

知勝奴鴨又入不勝鴨なり

あり古ハかとのふか

りも同多不用ひくあり

りかたとい入言也不勝と

書る文字のよく入不

かふ不堪の意

○多きれハ 万葉古今古

六帖なる多きれハ

つげりなる多きれハ

いも多きれハ

○式 字書ハ式ハ則也

○横斜 林和靖山園小梅

○武蔵 入間郡所澤村ハ

谷大木戸より七里西云

豆相記

武蔵野

武蔵野

世はたふさふさの春の光り

依波頭意

山海船聖

旅天葉

歳云

風雪

野梅

白髮

影横斜

旅天葉

歳云

風雪

野梅

白髮

影横斜

旅天葉

歳云

風雪

野梅

白髮

影横斜

旅天葉

歳云

風雪

野梅

白髮

影横斜

旅天葉

歳云

風雪

野梅

白髮

影横斜

旅天葉

歳云

風雪

野梅

白髮

影横斜

旅天葉

○鴻雁行 禮記王制篇
兄之齒雁行也 齒年數也
年與兄相若者弟之齒也如
雁序行漸退後也 說文不
大曰鴻小曰雁 詩經鴻雁
于飛肅其羽

○春色漸欲搖 前漢律
歷志少陽者東方東動也
陽氣動物於時為春春蠢
也物蠢生迺動運故為規

○詩人墨客 五雜俎牛女之
事云云文人墨士乃君為詩
本朝無題詩九十九文墨客
姜夔詞城南詩客岑寂
書言故事詩人才多 辨詩

○邊塞 說文塞隔也 唐邊
廣韻塞邊塞也 唐邊塞
詩邊地鳴花少

○風騷人 古今類書纂要
上行下效刺美風化緩而不
迫謂之風 幽憂憤悱寓之比
興謂之騷 唐杜甫詩山居
精典籍文雅涉風騷

○黃鳥出幽谷 詩伐木出自
幽谷遷于喬木

○野水海漂 海每字字に
シの松りなまぬわん下句類
字の對して毎ソ子ニ訓ヘキ

○脊令枝 初二句兄弟連枝也
脊令鳥也 脊令鳥也 脊令鳥
脊令鳥也 脊令鳥也 脊令鳥

○昔來 字彙昔古文春字
試筆の奇 羅山文集我朝年甫寫字者皆稱試筆故試簡試免試韻試賦試電或稱試

○試筆の奇 羅山文集我朝年甫寫字者皆稱試筆故試簡試免試韻試賦試電或稱試

○試筆の奇 羅山文集我朝年甫寫字者皆稱試筆故試簡試免試韻試賦試電或稱試

春色漸欲搖 前漢律
歷志少陽者東方東動也
陽氣動物於時為春春蠢
也物蠢生迺動運故為規

邊塞曾無風騷人 窗梅牆柳獨其春
為誰黃鳥出幽谷 泝氣迎晴一曲新

野水海漂鴻雁影 天風頻動春令枝
昔來其會知歸路 旧里山花落後時

正月朔日試筆乃終
今朝雪太降祝豐年之嘉瑞載短篇一章矣
青陽朔且日 瑞雪示豐年

料識萬邦土 歡娛正快然

此野... 何時來月見橫斜

寒鴛幽谷樓吾家 一曲朝來出靄霞

蒼外厭梅半離雪 何時來月見橫斜

試筆の奇 羅山文集我朝年甫寫字者皆稱試筆故試簡試免試韻試賦試電或稱試

○渭城渭洛渭城など西土の名を連へり言へ周礼夏官曰職方氏辨九州之風正西曰雍州其後渭洛唐王維詩曰風動角弓鳴將軍獵渭城云渭水出陝西平涼府渭源縣爲鼠山至西安府同州次河井岡氏按唐王維送元二使安西詩渭城朝雨邑輕塵客舍青青柳色新勸君更盡一杯酒西出陽關無故人詩中陽關曲云唐武送別の送中を必此詩を指しと云れは後渭城別と詠ひしは故郷の人は別れをよみて云ふなり陽關曲のよ東坡詩語及

○自題黃梁梁說文に米名一曰粟類米之善者五穀之長爾雅異粟有黃青白三種枕中記呂翁盧生同邸方蒸黃粱翁取枕披盧曰枕此可榮適如願生適枕未幾登第出入將相五十年及無黃粱尚未熟唐杜甫詩夜雨剪春韭新炊聞黃粱梁字彙梁俗字取亂切竈炊變取其進火謂之變取其氣上謂之炊白氏文集小翟氏自變薪和名本草下黃梁米青梁米陶景注曰梁米皆是粟類也和名何汝乃与祿

○手煮菘手煮菘の字なり諸文本草菘可食多通名爲菘菘菘菘魯語挂能植百穀百蔬孟郊詩渴飲濯清泉饑食無名蔬白氏文集六終日一蔬食終年一布裘

○武州小武州名兩方角抄中一國坤がく野なり國中が山なり孫父山大嶽なり孫のり云く此説大さより北の方上野界なり和の方信濃中斐相模等の國境中を山ありと云く野あり

○旬旬日初上米初下注也

○軒名續韻府劉歆等定新塔禮親迎立輅軒馬梁任昉梁問輅軒青紫如拾地芥注云言賓位之服也車載之多字彙輅軒車曰輅輅曰軒

○上遊軒上止の誤字なり此地あり車と云く

○蕭々白氏文集八蕭々誰家村秋梨葉半拆漢々誰家園秋韭花初白

旅亭昔雨日如傘 垌野道遙絕往還
贏得嘯吟戰間緒 黃鸝交語問詩筵
又乃日百されく多ふありされをあたし酒く飲き
ちれつとくゆりされ

武州山象の勝地ゆるるるる十々るる道々
一旬此地上遊軒 雲水森然山有靈
殘夜無眠聽春雨 蕭々深院短檠青
次の表を讀しと月と抄りるはちかく梅のくも
和漢美之まを猶吟

木橋

○鞠 和名抄四十四蹴鞠

世間云未利古由蹴音十陸

及字亦作蹴傳云彈基

賦序云漢成帝好蹴鞠

公羊傳注蹴鞠以足進踏

也皇極紀三年條云御法興

寺柳樹之打打鞠之儀而

候皮鞋隨繩脫落取置

掌中前跪恭奉中大兄

云云通證云此謂蹴鞠也

史標騎傳穿城蹋鞠

正義蹴鞠即今之打鞠也

未利圓義也事林廣記

天下總呼圓公由猶不置

然らる蹴鞠と打鞠と

蹴鞠と打鞠と云々

和名抄云と打鞠内典云或

謂之拍毬師說云萬利宗

知唐韻云毬毛丸打者也

と別小出丸ハ差別のなき

なり毬囊抄ハ世に段に鞠ト

鞠ト字異共心同也私思

ハ今手ヲリト云時必鞠ト字ヲ

可用狀拘鞠ト書テリ打ト

ヨムテニテ扱ル也足云蹴ハ

蹋鞠ト云ハテリ鞠起リ

中天竺ハ佛世留支長者鞠

云蹴始タリ云云後漢書ノ梁

冀傳ハ鞠ハ黃帝作給テ云云拾遺納言譜ハ用明天皇時太子所治然テナクサメ奉テ下テ月卿

雲岡ノ造出シ給テ下云リ是日日本始也然ルニ三國起リ區ナルヲ云云一條兼良公雲井の春也也

鞠の起りのより難波飛鳥井兩流のほとりあり引證せしむるありあれども長きハ略也

諸神記鞠神ハ中河門西河院東河院野井小社三座是鞠神也此地成通御日跡也

○はのゝとく方葉三神朝霧勢鬘為年云云

○はのゝとく方葉十八願真珠長歌安佐神我美可伎母氣頭良受

○大石信濃守文大石氏曰信乃守の父源左衛門尉房重也家譜曰房重ハ亨德四年ハ亥

正月廿二日武州玉河分倍河原合戦時上杉家先陣ニ進ミテ為鎌倉勢討死云云亨德四年

ヨリ今年文明十九年ハ相嘗三十二年也此合戦ハ鎌倉大草紙ニ見エタリ

○三十三回忌 園大曆小貞和三年九月廿五日竹林院入道左大臣世三回忌辰也因茲廣義

門院就テ于西園寺無量光院壇場被修所佛更更件暮月佛更更規未詳云云且取テ敬

昔の如く和入るは二十の如きまゝの如き

初春ニ暮

初春ニ暮の如きまゝの如き

帰厚出

初春ニ暮の如きまゝの如き

浦春日

初春ニ暮の如きまゝの如き

暮中ニ暮

後初暮

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

初春ニ暮の如きまゝの如き

勝志五都留郡岩殿権現
号七社権現祭神熊野白
山山王日光伊豆菅根蔵
王平城天皇大同元年鎮座
也岩窟之中有各木像長
七尺許又有觀音堂三重塔
九輪下升形銘文兼平三年
七月十日大比丘集建立云云
別當常樂院大坊云本山
修驗社領十四石獨立高山
也此辺武田家老臣小山田
備中守城跡アリ今傳鐘
當山アリ天正十年武田家
滅亡時左兵衛督逆謀ニ
依テ家断絶云菅窺武
鑑ニ武田勝頼郡内小山田
兵衛尉ヲ御頼岩殿へ入給
處云云西遊行囊抄四申示
岩殿村ハ街道ヨリ五六町北
山下アリ觀音堂村中ニ有

あつていふはさかたに
かゝる甲州の地は
多かり参詣の
たゞの地は
後移りく川の
に
里人の
朽損の
あつていふは
はつと
あつていふは
あつていふは

毎年三月十八日祭日トス
旧壘アリ村上山ナリ大戸山
岩殿山云是武田臣小山田氏
数代居城堅固之地也山頂ニ
二百間四方平地有其中窪キ
所ニ水有岩殿権現神名帳
表門神社云岩殿山半腰窟
中ニ在リ窟口世間四方奥へ
間有毎秋七月十七日祭日近郷
老若群集ス
○核橋 甲斐都留郡中々
驛の名と核橋と云入口橋あり
甲斐志略五十四核橋驛北
桂川ニ架ス長十七間幅一丈一尺
高欄有一之刳木六間四尺二之
刳木七間二尺三之刳木八間四
刳木八間四尺地中入事又同行
梁九間四尺大梁六間橋上ヨリ
水際ニテ十七間世ニ是ヲ三三
ト云大概ナリ或時核断岸ノ

あつていふはさかたに
かゝる甲州の地は
多かり参詣の
たゞの地は
後移りく川の
に
里人の
朽損の
あつていふは
はつと
あつていふは
あつていふは

雲霞漢く渡長梯 四顧山川眼易迷
吟歩誤令疑入峽 漢隈残月断核啼

今
か
世

藤蔓ヲ傳向岸至見テ始テ橋ヲ作云傳タリ祖孫峽中記行猿橋猿王所架長一丈連水際三尋而水深亦三尋云橋下無一柱後

あつたにゆへにせむくつらうか尾と信後の中
かすのむありのかかたのいふなりけふはかく

兩岸累鉅材架越上者必出下者外尺許愈累愈出以得相近而橋之誠神造也云一驛百家在二片石上則此川亦一大石渠身益駭異聞遂宿于驛云甲斐國都留郡妙法寺記錄永正十七庚辰年當郡猿橋掛同天文二年癸巳三月猿橋燒同天文九庚子年霜月猿橋掛西遊行囊抄四中三自天觀到于猿橋一里橋驛出口アリ云名寄つたれは必ひをばへんとてさるるをいへり云はるる此奇遠江云今遠江ヲ尋止猿橋名ナリ此所ヲ詠ルナレ云云

○三ヶさきぬ 白氏文集ヲ註峽猿亦何意隴水復何情為愁人身皆為腸斷声同十八年試聽腸斷巴猿叫此外和漢朗詠集猿詩多ク見ゆ古今集十九法皇西川ヲ行ハルマシヨリ猿山のうひふまけをいふとさうとさうといひあまのいかなんをわづらひのゆのふひあつたかあはあはぬのゆ

○水の内 僧祇律佛告諸比丘過去世時有城名波羅奈國名迦尸於空閑處有五百餘猴遊行見樹下有井井中見月共執樹枝手尾相接入井取月恐世黑暗枝折身死云云

○漢々 漢字彙沙漠又廣也大也杜甫詩兵戈塵漢江漢月娟劉仙倫曰雲漢水浴去奴奴白氏文集十漢秋雲起悄夜寒生

四顧何慘烈

○峽 山峭夾水曰峽又山名蜀楚之交山有三峽輿地志巴陵楚地有三峽明月峽巫山峽廣澤峽和漢朗詠集注從巴峽初成字猿過巫陽始斷腸白居易

○あつらの里 甲斐都留郡初狩村上中下三村あり大月驛駒橋驛の西中々笹子川此驛のあつら山の中川の中接る地あり鹿籠東籠なるとり里の名なるあつら西遊行囊抄四中二自黒位到于初雁一里半自初雁到于花崎一里六町此驛上中下三村ヲ以テ一驛トシ上十五日下十五日分テ馬次メ甲斐名勝志五都留郡初雁里木の葉の役あり石有又燃ル石あり云

○柏尾 甲斐山梨郡勝沼の東の方柏尾村あり甲斐志略柏尾尾崎林八代郡黒駒山へモ續タル地ナレ古柏前ノ牧ナリトモ云リ甲斐名勝志一ニ柏前牧云云八代郡有柏尾山而黒駒山值其南駒飼村在其北皆不甚遠蓋前與崎尾與峽同訓而皆縁山水之稱則此其一帶之地云云同二山梨郡柏尾山大善寺真言宗本尊藥師如來養老二年草創閑山行基僧正寺領三十石余山林有此辺勝沼岩崎の二村より葡萄出當國名産也云云西遊行囊抄四中二自柏尾村勝沼下鶴瀬の間に非驛宿人家多自性院藥師寺真言宗本尊藥師佛寺領此石大地也村中地岡ナリ寺僧并山伏アリ今考小寺号ハるるこれと同一寺カク諸國

圭齋録中も高三十二石余八代郡柏尾村真言新義大善寺と云云茶師寺名ハるるア、甲陽軍鑑天正十年春織田甲州攻入勝頼新府城ヲ去小山田左兵衛申旨任テ都留郡内岩殿城入テ柏尾到テ七日逗留勝頼柏尾ノチンクハ切落セ下知セラル是ハ源氏調伏寺也故ニ如是云云雖然山伏トモ不兼引却テ勝頼ノ敵ス鶴瀬ヨリ郡内ノ方ノ城戸ヲ幾重モ構テ勝頼ヲ不入依之勝頼田野ノ天目山ニ赴ク云

○あつらとくはものつゝ 柏尾を句の中々あつら尾 古今混るる候字

○あつらとくはものつゝ 柏尾を句の中々あつら尾 古今混るる候字

あれが古言ハ一向不用ひされども今々の所分は世換ひ多かりきかた人のみよけの上の無事を
押しと用ひ例あり後よりあらはれども古言多用がたなきのつと書り世分今も古言あり
と人々とのつとををりもをりも例ありと中よりいつのつとをり

○武田系譜清和源氏新撰

三郎義光二男刑部三郎武田
冠者義清三十三代刑部大輔
信昌永正二年九月卒五十九
歳号永昌院

○あし孫 甲斐志略の巨麻郡

白峯本州第一高山而西方
鎮タリ國風三所詠甲斐之嶺
即是也南北連テ三峯其
北方最高者專稱白峯中
間峯隔武川筋屬若倉村
本村ヲ到テ絶頂凡十里許云

○志保の山 同志略の塩山
山梨郡千野村上於曾村上
塩後村上井尻村三日市場
五村中一在孤山也塩川塩
山出其水塩味ヲ帶リ云云

山ノ周廻一里高十町鹽ヲ
産ス因テ為名ト云云○野州長
考の吐懐扁小甲斐史の海あり
とをえ名を平家抄の越
中ノ塩山われ指すの遺も
平家抄云々平家物語七
能登越中の境多き海の山とある
とも志保村の能登國之延喜式神
名帳能登國羽咋郡志保神社
今も此名一志保村あり後世
塩と云子浦村とも能登字の誤
なれ塩の山能登とあつたつ
ちと一又甲斐史の海ありと云
山中より鹽の山の唐土天竺の
重例多し重泥國を名なきも
此記の末も奥州の大塩の山と
引くともいふるべしと云々

○甲斐史の海ありと云々
甲斐史の海ありと云々
本草和名下は山塩甜西の山
西遊行叢書抄中三山自甲府行程二里此山禪律アリ

花を花境とのいふは秋のちあす日とくささつと云う
大補終ふ事よけりくささつと云うと云う
けりくれの海を海と云うは海と云うは
海のちあす日とくささつと云うは秋のちあす日とく
ささつと云うは秋のちあす日とくささつと云うは
此二をささつと云うは海と云うは海と云うは
ささつと云うは海と云うは海と云うは
海のちあす日とくささつと云うは秋のちあす日とく
ささつと云うは秋のちあす日とくささつと云うは

梅のちあす日とくささつと云うは秋のちあす日とく
ささつと云うは秋のちあす日とくささつと云うは
祖母乃比直虎のちあす日とくささつと云うは
ちあす日とくささつと云うは秋のちあす日とく
ささつと云うは秋のちあす日とくささつと云うは
ちあす日とくささつと云うは秋のちあす日とく
ささつと云うは秋のちあす日とくささつと云うは

甲斐史の海ありと云々
本草和名下は山塩甜西の山
西遊行叢書抄中三山自甲府行程二里此山禪律アリ

二月十五日臨涅槃時出種多光大地震動聲至有頂光徧三千周書異記穆王即位ヨリ五十二年壬申歲二月十五日云大地皆悉震動西方有百虹十二道南北通貫連夜不滅穆王向太史扈多曰是何徵也扈多對云西方有大聖人滅度其現耳釋迦譜第一卷八相條云二月十五日於拘尸那城娑羅雙樹間臥七日寤其林忽然變白猶如白鶴云

○かた物とて名 武藏入間郡勝呂郷片柳村あり此頃路を考ふ吉田より甲府道の

○まのつとく物 朗詠 春色徒東到とあるやうく春色のみどりを取ありせと

○まのつとく物 地名未詳武藏の内の一十載集悉一なる女のまのつとく火はこれ

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

○まのつとく物 又草の刈推とてまのつとくをまのつとくすといふものも

てふ事たりて遠國なれども邪伏にたあむあひとゆき類書纂要小尋常八猶
言庸常庸劣平常言非奇也云云これあり一結一用を復尋常あり

○百韻 八雲抄抄一法百韻百韻とて今中改ありのりなり次第小多く連之近代を
ゆけつれは果ありて付たる今之松浦のまやりハ不及口信松葉をまをる多しなりなり

付之有以く松葉又禁制り及未代を可存終り也一發句ハ於當座可然人得之云、三餘
批ノ行紀事云正朔連歌詠諸各用席凡此京師一連奇長跡之花下又謂宗匠、毎年
今朝其一家中玩其事者及弟子等聚其宗匠家各作連歌其第一句謂發句自其發
句至百句是准詩句稱百韻然對其發句之第三句稱脇第三句作之為采而近此三句ヲ

稱三物云云
○宿願 謠曲抄二小宿願ハ久シキ願ニナリ

○志原のやとつる名和名抄
下野國鹽屋ノ夜郡ヲ氏家
阿久津、喜連川をとりお刃
此郡之、和漢三才圖會六十七

奥州道の條小守都宮里
白澤一里宇治江三里喜連
川三里佐久山一里余太田原一里
銅掛一里野原蘆生三津奥州
白坂一里余白川云云、松の

う津乃とてをまのり物あふあわのりとなり
まのり海ふ里まのりあたるていん
松のうとてをまのり物あふあわのりとなり
まのり海ふ里まのりあたるていん
里入のうとてをまのり物あふあわのりとなり

道多小塩谷ノ郡ハ小形ま
山多一川清とてふ鹽谷
伯耆守とて城居此郡と世
領一那須家等と松葉ま
あり之東鑑太平記等ま
此家の人とてをまのり
なり一少田原陣の後に聖
臣家より改易ま、今佐竹の
家臣より白澤のま、須川
ま、此郡なり山中小塩谷
とて温泉のあり地あり
○うとてをまのり物あふあわのりとなり
まのり海ふ里まのりあたるていん
松のうとてをまのり物あふあわのりとなり
まのり海ふ里まのりあたるていん
里入のうとてをまのり物あふあわのりとなり

松のうとてをまのり物あふあわのりとなり
まのり海ふ里まのりあたるていん
里入のうとてをまのり物あふあわのりとなり
まのり海ふ里まのりあたるていん
里入のうとてをまのり物あふあわのりとなり
まのり海ふ里まのりあたるていん
里入のうとてをまのり物あふあわのりとなり
まのり海ふ里まのりあたるていん

勢圖ヲ解シ希陣トノ間ニ云云云白河古傳記云藤原清衡子基衡鎮守府將軍ト其
 頃亂國故興州入口白河に關ラス正野州ヲ押入又桐倉浦岡郡大洪關ヲ入正野陸下總ヲ押入而
 所ニ明神ヲ祭リ關明神正崇ヲ奉祀是ヲ白河關ト云云又白河古傳考云回國雜記云白河ニ
 所ノ關ニ至ルト云々是利ノ地唱ヘシ名トヤ其頃ニヤク關ハ廢シタラシメ所ト云古傳記云其旗ノ宿
 村ト大洪ト云云非ス旗宿村ノ首尾關門ノ處ニ設テ行旅ヲ入メ改メ非常ヲ戒メ一軍ヲ關ハテラテニ
 皇ニ敬重ニ有シ故ニ關ト云云云云大洪ノ方ニ僅ニ六七町ヲ隔テ關下ノ關ト唱ル地アル也今ノ
 官道白河ト云ハ旗宿ノ古道ト云フ官道ト云フ所ノ關ト云云今ノ官道ニ關アリシトモ關ニ遺跡ト
 思シキ地トシ恐ラシク非ナレト旗宿ノ關跡ハ土地ノ形勢モ此所ヲ鑑メテハ行路モ俄ニ外へ道ヲ避ク
 ベキ岐路モナシ其地ヲ見付ニ関山橫タリ鳥ノ翼ヲ打伸ル如ク蟠リ又義經ノ旗立櫻家隆卿ノ
 二位殿杉義家朝臣ノ母衣掛楓等ノ古木生茂リ白河ノ流モ此地ヨリ出テ東流又因テ若侯侯定信諸
 臣ニ命テ考索シ此地ノ関址タルト標メ碑ヲ立テ碑表ニ古關蹟ノ三字ヲ大書シ裏ニ左ノ文ヲ
 勒メ表出シテハリ

白河關蹟埋没不知其處所者久
 矣旗宿村西有叢祠地隆然而
 高所謂白河遠其下而流焉考
 之圖史詠歌又徵地形老農之言
 此其為遺址較然不疑也迺建碑
 以標焉爾
 寛政十二年八月一日
 白河城主使四位下行左近衛權少將兼越中守源朝臣定信識

文治五年結城氏白河郡ヲ賜テ城ヲ築テ興州ノ咽喉ヲ控制スバ此頃ヨリ關ハ廢シタルカ云々東遊
 行囊抄云ニ旗宿村ハ治兼項義經平家追討ノ為ニ卒共興州ヨリ兵洛ハ時此所ニ旌旗ヲ奉ラル
 故ニ所名トス云云関山ハ白河關址ナリ堺ノ明神ト此所ト云所ノ關アリ故ニ所ノ関ト云トナリ今ノ
 舊路ト成タリ成就山滿願寺関山トナリ聖武帝勅願所行基菩薩關基本尊觀音也云云
 野跡ニ考ルニ所ノ關跡ト云々中ノ土人ノ口ニ云々今迄ト云々此ノ所ノ關ト云々此ノ所ノ關ト云々
 古來ノ其例又云々關界ナレバ按利ノ爲メヨリ關ニ此ノ所ノ關ト云々此ノ所ノ關ト云々此ノ所ノ關ト云々
 白河ノ關ハ今ノ所ニ在リ又高田氏ノ考云白河ノ關ハ高田氏ノ考云白河ノ關ハ高田氏ノ考云白河ノ關ハ高田氏ノ考云
 白川ノ關ハ今ノ所ニ在リ又高田氏ノ考云白河ノ關ハ高田氏ノ考云白河ノ關ハ高田氏ノ考云白河ノ關ハ高田氏ノ考云
 白川ニ此ノ所ノ關ト云々此ノ所ノ關ト云々此ノ所ノ關ト云々此ノ所ノ關ト云々此ノ所ノ關ト云々

○白川入道 白河古傳考云白河入道ト云ニ說小峯直朝ナラシト見ユ今ノ白河城東ノ
 搦村ノ墟ヲ古ノ白河城ト云今ノ白河城ハ小峯ト云ニ也同書ニ結城系圖アリ略シテ此ニ出ス
 ○朝光 賴朝將軍御子法名日阿弓結城七郎上野介母八田武者所宗綱女
 仙道表鑑云結城七郎朝光伊達泰衡等追討功因白河岩藏爲取三郡源賴朝賜是結城氏白河領
 朝廣 朝光長男結城大藏權少輔結城七郎後五位下上野介
 實賴朝卿子尼所置所廢跡今在潛結城養幼名并末代
 廣綱 朝光長男子結城七郎
 下總國結城ニ居ス

祐廣

廣綱ノ男又朝廣三男廣綱ノ弟
白河跡左衛門尉白河結城家始

親朝

宗廣一男上野介修理大夫始
始親廣又親政三河守大藏権必輔又太輔

滿朝

頭朝長男号小峯左兵衛
中務丞道号長川諱小道久

直朝

氏朝長男号閑川寺殿
道号海蔵諱道朝修撰

道興准后當國所下向時白河入道入送の儀云々文書八規別當方善院ニ蔵其文

此雜記ニ白河入道と云々ハ此直朝方なりと云々

下向儀云々
結城上野入道
伊國五鹿高時
白河入道及
別

三月廿七日
白河入道及

別

白河跡左衛門尉祐廣ノ兄廣綱ノ父朝廣ノ跡ヲ継テ下總ノ結城ニテリ次男祐廣白河ノ住テ白河結城トテ別家ニ成テ祐廣ノ子宗廣ヲ結城上野入道ト云号ニ君山道忠又白河上野前司トモ見テタリ武勇技群ノ人也後醍醐天皇ヨリ綸旨ヲ賜リ新田義貞ト謀ラ合テ高時ヲ討テ其時ノ綸旨ニ曰

綸旨

汝相模守平多村法師様守忠
礼儀不敏國家ノ制乾操欲諸國若
其乃氏傳亂ノ事何事ニハ平
己の朝敵不道天罰速相率不軍
身之退討云々勳功莫立依情急依
云々

以上ノ文書白河七郎所蔵ナリ云々

伊國五鹿高時
結城上野入道
三月廿七日
白河入道及

白河入道及
三月廿七日
白河入道及

あひくを修りし人などありしが宗長も此處に仙臺の迦布田郡ありしが山とを
今世ありしかを主人不忘山といひありしが白河郡ありしが山とを宗長も此處に
もと多き所ありしが山とを宗長も此處に山とを宗長も此處に山とを宗長も此處に
...
○田村といふ者拾林抄中
未陸奥國郡名の中に高
野といふ者奥羽觀迹
志高野今号田村郡
○あとの名和名抄陸奥

是より田村といふ者ありしが
宗長も此處に山とを宗長も此處に
もと多き所ありしが山とを宗長も此處に

國安積郡安積郡古
今集十四の所にありしが山とを
...
積郡二本松領宝珠村在り
今ハ宝珠の領日和田郡
の辺也海は沼川との水
あり又公道の邊も橋本は
沼と云大沼ありしが山とを
沼と云大沼ありしが山とを
...
觀迹志高野今号田村郡

安積郡の山とを宗長も此處に
もと多き所ありしが山とを宗長も此處に
...
この山ありしが山とを宗長も此處に

一八今の遺跡より二里許
西の方あり、南麓の西に並んで
まゝ山を登りしむるに此山あり
下は西へ急降あり、此山あり
下に古の宮あり、御あり、古跡
多し、此古道、片平村、今道の
和道、里西の西の方半里許、
山の井の跡あり、古跡あり、
碑あり、同山つゞき、下へ下
を、城と云く、民家三三あり、
片平村より一里半あり、
所へ、濕地多し、花菖蒲、
菖菖、花多し、自然の
沼あり、此沼の淵へ入る、
なり、今、山つゞき、
古道の跡あり、今、
の、
なり、
なり、

なごひつづく、
又、
人、
く、
あ、
橋、
ま、
く、
あ、

○あさひ山、
云昔城王遣子陸奥國之時、
宴樂於是有前采女風流娘子、
解脫樂飲終日、
青松臨山頭、
為廢井久、
と、
○あさひ山、
新古今集十六、
隈川、
和歌、
閑寂、
一向、
や、
源、
ト云、
三郡、
川、

江戶下谷御成道青雲堂英文藏歌書目録
 一 〇一 〇二 〇三 〇四 〇五 〇六 〇七 〇八 〇九 一〇
 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇
 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇
 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇
 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇
 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇
 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇
 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇
 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇
 一〇一 一〇二 一〇三 一〇四 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一〇一〇

江戸下谷御成道青雲堂英文藏歌書目録

名所子種露 關岡世沙為大人著 全十冊

此書の名所子種露は、關岡世沙為大人の著述である。この書は、江戸下谷御成道の御成道にちなんで、名所子種露と題して編纂されたものである。全十冊に分けられ、それぞれが江戸下谷御成道の御成道にちなんで、名所子種露と題して編纂されたものである。

名所子種露別注 同上 全百巻

此書の本巻は、關岡世沙為大人の著述である。この書は、江戸下谷御成道の御成道にちなんで、名所子種露と題して編纂されたものである。全百巻に分けられ、それぞれが江戸下谷御成道の御成道にちなんで、名所子種露と題して編纂されたものである。

日本紀竟宴之歌標註 桂園大人校 全二冊

此書は紀伊國の古刹の傳へたる其年親王の御歌の御年并
兼仲の御歌集の御年校の御年とて校訂し且其の標註を
加へたる御年並の御年並の御年とて御年並の御年並の御年並
の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並

田國雜記標註 年並の御年並の御年並 全二冊

此書は紀伊國の古刹の傳へたる其年親王の御歌の御年并
兼仲の御歌集の御年校の御年とて校訂し且其の標註を
加へたる御年並の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並
の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並

加茂真淵梅合 大石多行 大人異 全一冊

此書は陸奥の加茂の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並
の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並
の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並の御年並

名乗字引 井上文雄先生著 懐中折本 全一冊

我朝人物名字ヲ稱スルニ訓義ヲ以テシテ音ヲ以テ稱
スルモノ罕ナリタトハ賴朝ノ訓典利登茂義貞ヲ
與志佐太信長ヲ乃步奈賀ノ類兒女子トイヘ能是ヲ知
然レドモ其他名字和訓何ソ悉ク知吏ヲ得ヤ此書三因テ
古今ノ名字ヲ讀トキハ殆掌ヲ指カ知シ然レバ和歌讀人
或ハ軍書杯畧人ハ机ニ置テ讀得カキ文字ヲ列トキ
自ラ知ルハナリ

小野道風秋萩帖

世ニ小野道風ノ書数多有ト雖モ秋萩帖ハ別テヨク人ノ知所ニ
カレト今世ニ傳ル所ノ秋萩帖ト稱スルモノ数枚アレモ摹写惡シ
其筆意ヲ失ス今此帖ハ其摹写ノ轉傳ヲ重子ス然レモ其筆
意玄妙ニシテ他ノ能及フ所ヲラス因テ今帖ノ初ニ道風真蹟
ト篆書ニ記シ流布ノ俗本ト別ナル雅帖也

日本名家法帖

全三冊

此墨帖ハ弘法大師ヨリ怪々翁ニ至ルマデ其真蹟ヲ摹刻
シテ筆道ヲ好メル人ノ至寶トス其筆跡ノ妙ナルヲ学ハ自ラ
筆意妙道ニ至ル

弘法大師 本頭道風朝臣 權大納言行成卿 左京大夫定実
修理大夫行能 伏見院 後伏見院 尊円親王 尊道親王
尊鎮親王 尊朝親王 尊純親王 近衛南白信基卿
本阿弥光悦 松花堂惺々翁

目次終

